

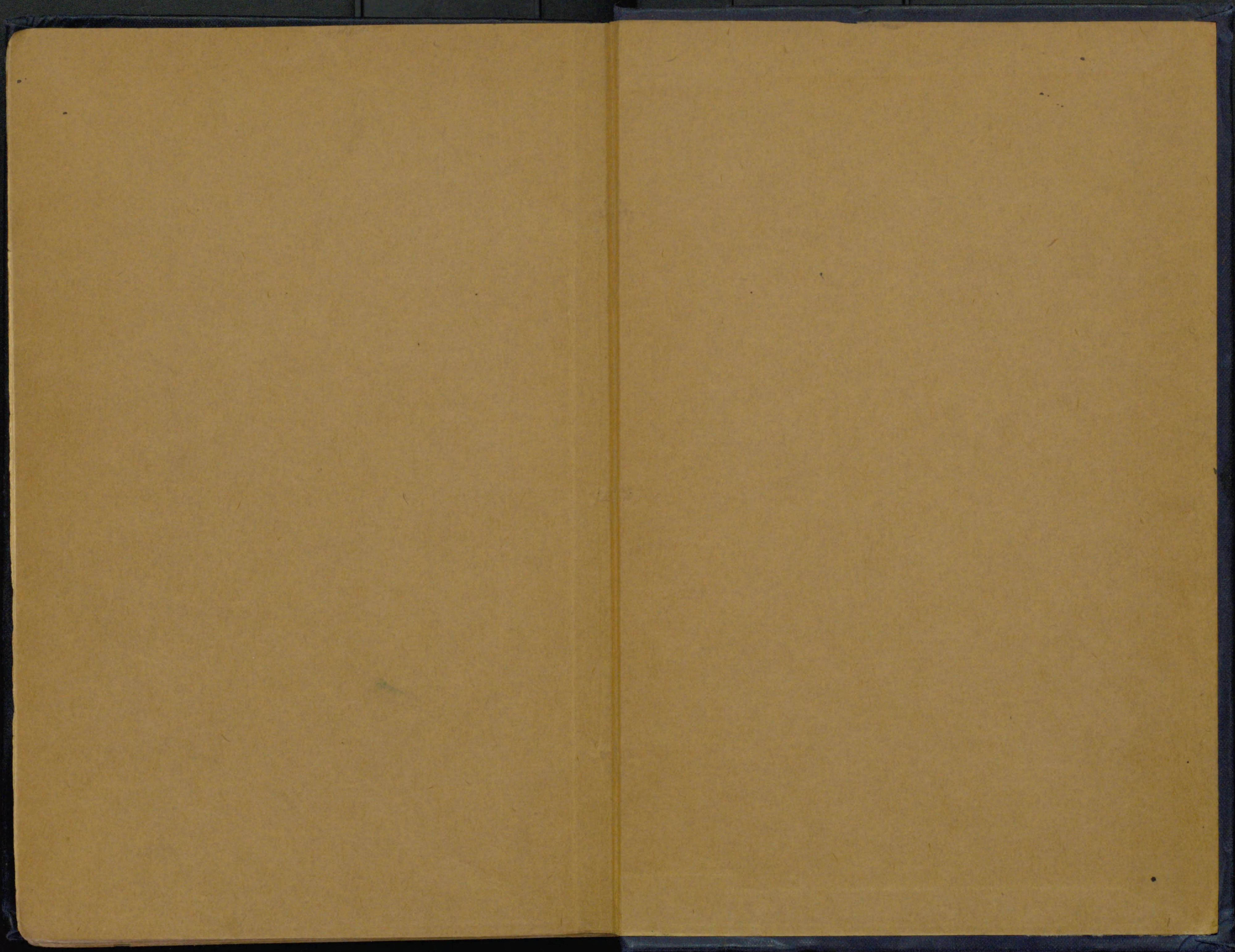
556-157-(1)

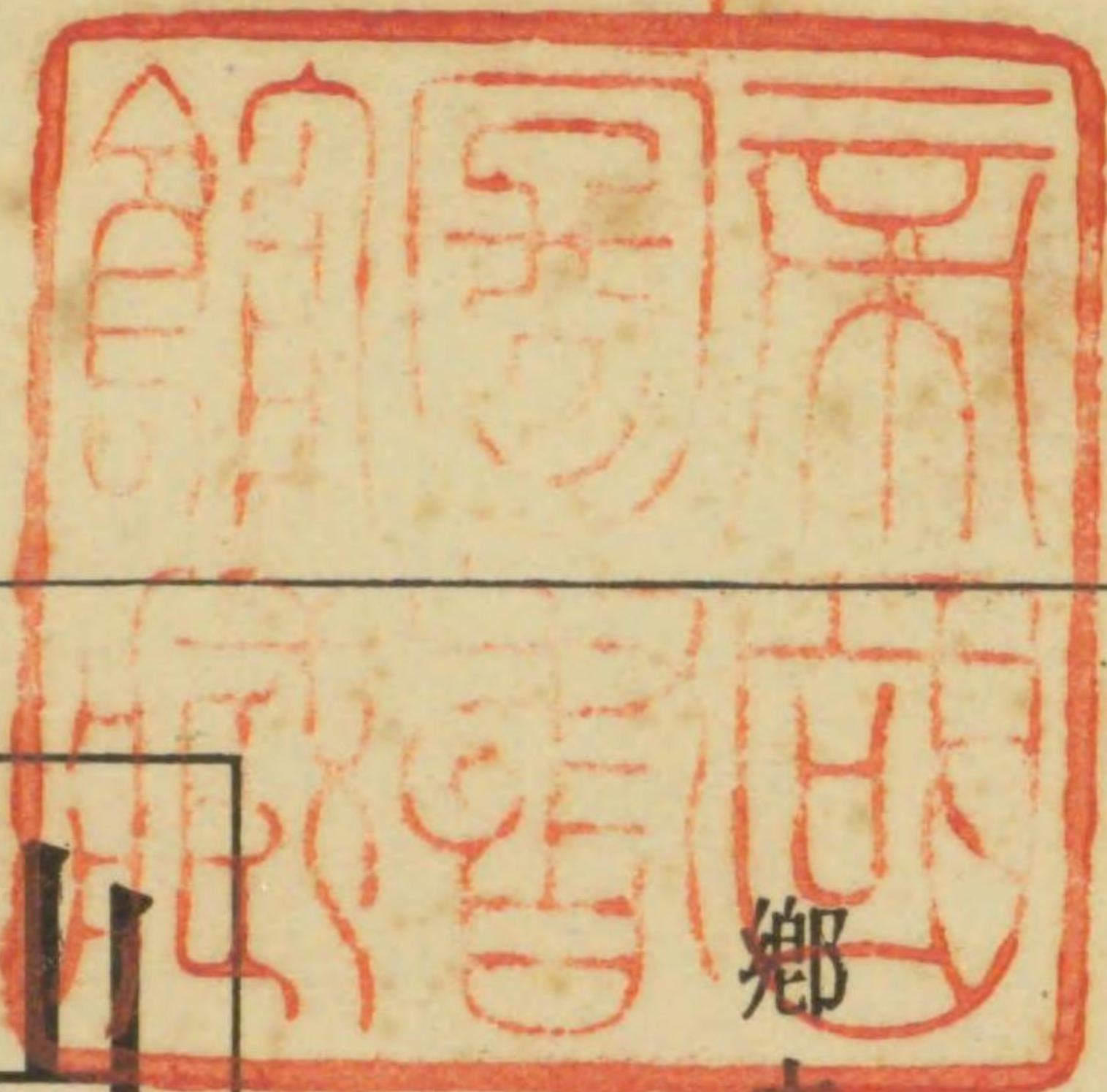


1200501510850

556

157





郷土研究社第二叢書

山の人生

柳田國男著

大正
15. 11. 20
内交

556-197

自序

山の人生と題する短い研究を、昨年朝日グラフに連載した時には、一番親切だと思つた友人の批評が、面白さうだがよく解らぬといふのであつた。あゝして胡麻かすのだらうといふ類の酷評も、少しはあつたやうに感じられた。勿論甚だ六かしくして、明晰に書いて見やうも無いのではあつたが、若しまだ出さなかつた材料を出し、簡略に失した説明を少し詳しくして見たら、あれ程にはあるまいといふのが、此書の刊行にあせつた眞實の動機であつた。ところが書いて居るうちに、自分にも一層解釋しにくくなつた點が現れたと同時に、二十年も前から考へて居た問題なるにも拘ら

二
ず、今になつて突然として心付くやうなことも大分あつた。従つて此一書の、自分の書齋生活の記念としての價値は少し加はつたが、愈以て前に作つた荒筋の間々へ、切れぐの追加をする方法の不適當であることが顯著になつた。併し之を書き改めるが爲に費すべき時間は、もう爰には無いのである。其上に資料の新供給を外部の同情者に仰ぐ爲にも、一應は此形を以て世に問ふ必要があるのである。なるほど此本には賛否の意見を學者に求めるだけの纏まつた結論といふものは無いかも知れぬが、それでも自分たち一派の主張として、新らしい知識を求めることばかりが學問であること、之を求める手段には、是まで一向に人に顧みられなかつた方面が多々であつて、それに今我々が手を著けて居るのだといふこと、天然の現象の最も大切なる一部分、即ち同胞國民の

多數者の數千年間の行爲と感想と經驗とが、曾て觀察し記録し又攻究せられなかつたのは不當だと云ふこと、今後の社會改造の準備にはそれが痛切に必要であると云ふこと、は、少なくとも實地を以て之を例證して居る積りである。學問を以て文雅の士の修養とし、乃至は職業搜索の方便と解して恠まなかつた人々は、此の所謂小題大做に對して、果して如何なる態度を取るであらうか。それも問題であり又現象である故に、最も精細に觀測して見ようと思ふ。

大正十五年十月

柳田國男

目次

自序

一 山に埋もれたる人生ある事	一頁
二 人間必ずしも住家を持たざる事	五
三 凡人遁世の事	一〇
四 稀に再び山より還る者ある事	一四
五 女人の山に入る者多き事	一九
六 山の神に嫁入すと謂ふ事	二四
七 町にも不思議なる迷子ありし事	三二

八 今も少年の往々にして神に隠さるゝ事……………四〇

九 神隠しに遭ひ易き氣質あるかと思ふ事……………四七

一〇 小兒の言に由つて幽界を知らんとせし事……………五三

一一 仙人出現の理由を研究すべき事……………六〇

一二 大和尚に化けて廻國せし狸の事……………七四

一三 神隠しに奇異なる約束ありし事……………八六

一四 殊に若き女の屢隠されし事……………九五

一五 生きて居るかと思ふ場合多かりし事……………一〇一

一六 深山の婚姻の事……………一二二

一七 鬼の子の里にも産れし事……………一二八

人生

もれたる人生ある事

吾が、私の外には一人もあるまい。三十年あまり前、世間に年に、西美濃の山の中で炭を焼く五十ばかりの男が、子り殺したことがあつた。

あとには十三になる男の子が一人あつた。そこへどうしじ歳くらゐの小娘を貰つて来て、山の炭焼小屋で一緒に育

二
前はもう私も忘れてしまつた。何としても炭は賣れず、
つも一合の米も手に入らなかつた。最後の日にも空手で戻
居る小さい者の顔を見るのがつらさに、すつと小屋の奥へ
つた。

小屋の口一ぱいに夕日がさして居た。秋の末の事であつた
その日當りの處にしやがんで、頻りに何かして居るので、
生懸命に仕事に使ふ大きな斧を磨いで居た。阿爺おとう、此でわ
つたさうである。さうして入口の材木を枕にして、二人
である。それを見るときらくとして、前後の考も無く
つた。それで自分は死ぬことが出来なくて、やがて捕へ

なつてから、特赦を受けて世中へ出て來たのである。さ

うして其からどうなつたか、すぐに又分らなくなつてしまつた。私は仔細あつて
只一度、此一件書類を読んで見たことがあるが、今は既にあの偉大なる人間苦の
記録も、どこかの長持の底で蝕びみ朽ちつゝあるであらう。

○
又同じ頃、美濃とは遙かに隔たつた九州の或町の囚獄に、謀殺罪で十二年の刑
に服して居た三十餘りの女性が、同じやうな悲しい運命の下に生きて居た。ある
山奥の村に生れ、男を持つたが親たちが許さぬので逃げた。子供が出来て後に生
活が苦しくなり、耻を忍んで郷里に還つて見ると、身寄りの者は知らぬうちに死
んで居て、笑ひ嘲ける人ばかり多かつた。すごくと再び浮世に出て行かうとし
たが、男の方は病身者で、とても働ける見込は無かつた。

大きな瀧の上の小路を、親子三人で通るときに、もう死なうぢや無いかと三人
の身體からだを、帯で一つに縛り附けて、高い樹の隙間から、淵を目掛けて飛込んだ。

數時間の後に、女房が自然と正氣に復つた時には、夫も死ねなかつたものと見えて、濡れた衣服で岸に上つて、傍の老樹の枝に首を吊つて自ら縊れて居り、赤ん坊は瀧壺の上の梢に引懸つて死んで居たといふ話である。

斯うして女一人だけが、意味も無しに生き残つてしまつた。死ぬ考も無い子を殺したから謀殺で、それでも十二年までの宥恕があつたのである。此のあはれな女も牢を出てから、既に年久しく消息が絶えて居る。多分はどこかの村の隅に、まだ抜け殻のやうな存在を續けて居ることであらう。

我々が空想で描いて見る世界よりも、隠れた現實の方が遙かに物深い。又我々をして考へしめる。是は今自分の説かうとする問題と直接の關係は無いのだが、斯んな機會で無いと思ひ出すことも無く、又何人も耳を貸さうとはしましから、序文の代りに書き残して置くのである。

二 人間必ずしも住家を持たざる事

黙つて山へ入つて還つて來なかつた人間の數も、中々少ないものでは無いやうである。十二三年前に、尾張瀬戸町に在る感化院に、不思議な身元の少年が二人まで入つて居た。其一人は例のサンカの兒で、相州の足柄で親に棄てられ、甲州から木曾の山を通つて、名古屋まで來て警察の保護を受けることになつた。

今一人の少年は丸三年の間、父とたゞ二人で深山の中に住んで居た。どうして出て來たのかは、此話をした二宮徳君も知らなかつたが、兎に角に三年の間は、火と云ふものを用ゐなかつたと語つたさうである。食物は悉く生で食べた。小さな弓を造つて鳥や魚を射て捕へることを、父から教へられた。

春が來ると、色々の樹の芽を摘んで其まゝ食へ、冬は草の根を掘つて食べたが、其中には至つて味の佳いものもあり、年中食物には聊かの不自由もしなかつた。

衣服は寒くなると小さな獣の皮に、木の葉などを綴つて着たと云ふ。

只一つ難儀であつたのは、冬の雨雪の時であつた。岩の窪みや大木のうつろの中に隠れて居ても、火が無い爲に非常に辛かつた。そこで斯う云ふ場合の爲に、川の岸にあるカハヤナギの類の、髯根の極めて多い樹木を抜いて来て、其根をよく水で洗ひ、それを寄せ集めて蒲團の代りにしたさうである。

話が又聞きで、此以上の事は何も分らない。此事を聞いた時には、直ぐにも瀬戸へ出かけて、もう少し前後の様子を尋ねたいと思つたが、何分にも暇が無かつた。かの感化院には記録でも残つては居ないであらうか。此少年が色々の身の上話をしたと云ふことだが、何かよく／＼の理由があつて、彼の父も中年から、山に入つてこんな生活をした者と思はれる。

○
サンカと稱する者の生活に付ては、永い間に色々な話を聞いて居る。我々平地

の住民との一番大きな相違は、穀物果樹家畜を當てにして居らぬ點、次には定まつた場處に家の無いと云ふ點であるかと思ふ。山野自然の産物を利用する技術が事のほか發達して居たやうであるが、その多くは話としても我々には傳はつて居らぬ。

冬になると暖かい海邊の砂濱などに出て來るのから察すると、彼等の夏の住居は山の中らしい。伊豆へは奥州から、遠州へは信濃から、伊勢の海岸へは飛驒の奥から、寒い季節にばかり出て來るといふことも聞いたが、サンカの社會には特別の交通路があつて、溪の中腹や林の片端、堤の外などの人に逢はぬ處を縫うて居る故に、移動の跡が明かでないのである。

磐城の相馬地方などでは、彼等をテンバと呼んで居る。山の中腹の南に面した處に、幾つかの岩屋がある。秋もやゝ末になつて、里の人たちが朝起きて山の方を見ると、この岩屋から細々と煙が揚がつて居る。あゝもうテンバが來て居るな

どいふ中に、子を負うた女がさゝらや竹籠を賣りに来る。箕などの損じたのを引受けて、山の岩屋に持つて歸つて修繕して来る。

八

土地の人とは丸々疎遠でも無かつた。若狭越前などでは河原に風呂敷油紙の小屋を掛けて暫く住み、斷りを謂つて其邊の竹や藤葛を伐つて僅かの工作をした。河川改修が河原を整理してしまつてからは、金を拂つて材料の竹を買ふ者さへあつた。しかも土著する者は至つて稀で、多くは程無く何れへか去つてしまふ。路の辻などに樹の枝又は竹をさし、しるしを残して行く者は彼等であつた。小枝に由つて先へ行つた者の數や方角を、後から来る者に知らしめる符號があるらしい仲間から出て常人に交はる者、殊に素性と内情とを談ることを甚だしく惡むが外から紛れて來てサンカの群に投ずる常人は次第に多いやうである。さうで無くとも人に問はれると、遠い國郡を名乗るのが普通で、其身の上話から眞の身元を知ることは六かしい。大體に追々世間並の衣食を愛好する風を生じ、中には町に入つて混同してしまはふとする者も多くなつた。それが正業を得にくい故に、折々は悪いこともするのだが、彼等の惡事は法外に荒い爲に、却つて容易にサンカの所業なることが知れるといふ。

しかも世の中と是だけの妥協すらも敢てせぬ者が、まだ少しは残つて居るかと思はれた。大正四年の京都の御大典の時は、諸國から出て來た拜觀人で、街道も宿屋も一杯になつた。十一月七日の車駕御到着の日などは、雲も無い青空に日がよく照つて、御苑も大通りも早天から、人を以て埋めてしまつたのに、尙遠く若王子の山の松林の中腹を望むと、一筋二筋の白い煙が細々と立つて居た。はゝあサンカが話をして居るなと思ふやうであつた。勿論彼等はわざとさうするのでは無かつた。

三 凡人遁世の事

一〇

曾て羽前の屋花澤附近に於て、一人の土木の工夫が、道を迷うて山の奥に入り人の住みさうにも無い谷底に、はからず親子三人の一家族を見たことがある。これは粗末ながら小屋を建て、住んでは居たが、三人ともに丸裸であつたと云ふ。

女房がひどく人を懐しがつて、色々と工夫に向つて里の話を尋ねた。何でも其亭主といふ者は、世の中に對してよほど大きな憤懣があつたらしく、再び平地へは下らぬと云ふ決心をして、こんな山の中へ入つて來たのだと謂つた。

工夫は一旦其處を立去つた後、再び引返して同じ小屋に行つて見ると、女房が彼と話をしたのを責めると云つて、縛り上げて折檻をして居るところであつたので、もう詳しい話も聞き得ずに、早々に歸つて來て、其後の事は一切不明になつて居る。

此話は山方石之助君から十數年前に聽いた。山に住む者の無口になり、一見無愛相になつてしまふことは、多くの人が知つて居る。必ずしも世を憎つて去つた者で無くとも、木曾の山奥で岩魚いしなを釣つて居る親爺でも、たま／＼里の人に出くはしても何の好奇心も無く、見向きもせず路を横ぎつて行くことがある。文字に現せない寂寞の威壓が、久しうして人の心理を變化せしめることは想像するところが出来る。

さうしてこんな人に僅かな思索力、乃至は僅かな信心が有れば、乃ち行者であり、或は仙人で有り得るかと思はれる。又天狗と稱する山の靈が眼の色怖ろしくやゝ氣六かしく且つ意地悪いものと考へられて居るのも、一部分は此種山中の人に逢つた經驗が、根を爲して居るのかも知れぬ。

○

近世の武人などは、主君長上に對して不満の有る場合に、無謀に生命を輕んじ

死を急ぎ、さらば討死をして殿様に御損を掛け申すべしと、謂つたやうな話が多かつた。戦亂の打續いた時世としては、それも自然なる決意であり得たが、人間の死ぬ機會はさう常に在つたわけでも無い。死なずに世の中に背くといふ方法は必ずしも時節を待つといふ趣意で無くとも、やはり山寺にでも入つて法師と共に生活するの他は無かつた。後にはそれを出離の因縁とし、菩提の種と名けて悦喜した者もあるが、古來の遁世者の全部を以て、佛道勝利の跡と見るのは當を得ないと思ふ。

其上に山に入り旅に出れば、必ずそこに頃合の御寺が有るといふわけでも無かつた。旅僧の生活をしようと思へば、少しは學問なり智恵なりが無ければならなかつた。何の頼む所も無い弱い人間の、たゞ如何にしても以前の群と共に居られぬ者には、死ぬか今一つは山に入るといふ方法しかなかつた。従つて生活の全く單調であつた前代の田舎には、存外に跡の少しも残らぬ遁世が多かつた筈で、後

世の我々にこそ是は珍しいが、實は昔は普通の生存の一様式であつたと思ふ。

それだけならよいが、人には尙是といふ理由が無くて、ふら／＼と山に入つて行く癖のやうなものがあつた。少なくとも今日の學問と推理だけでは、説明することの出來ぬ人間の消滅、殊には此世の執著の多さうな若い人たちが、突如として山野に紛れ込んでしまつて、何をして居るかも知れなくなることがあつた。自分がこの小さな書物で説いて見たいと思ふのは、主として斯うした方面の出來事である。是が遠い近い色々の民族の中にも折々は經驗せられる現象であるのか。はた又日本人にばかり特に、且つ頻繁に繰返されねばならぬ事情があつたのか。それすらも現在は尙明瞭で無いのである。しかも我々の間には言はず語らず、時代々々に行はれて居た解釋があつた。それがある程度まで人の平常の行爲と考へ方とを、左右して居たことは立證することが出来る。我々の親たちの信仰生活にも、之と交渉する部分が若干はあつた。しかも結局は今尙不可思議である以上、

將來何れかの學問が此問題を管轄すべきことは確かである。棄て、顧みられなかつたのは寧ろ不當であると思ふ。

四 稀に再び山より還る者ある事

是は以前新渡戸博士から聞いたことで、やはり少しも作り事らしく無い話である。陸中二戸郡（このへ）の深山で、獵人が獵に入つて野宿をして居ると、不意に奥から出て來た人があつた。

よく見ると數年前に、行方不明になつて居た村の小學教員であつた。ふとした事から山へ入りたくなつて家を飛出し、丸きり平地の人とちがつた生活をして、殆

ど仙人になりかけて居たのだが、或時此邊でマタギの者の晝辨當を見付けて喰つたところが、急に穀物の味が戀しくなつて、次第に山の中に住むことがいやになり、人が懐かしくしてとう／＼出て來たと謂つたさうである。それから里に戻つて如何したか。其後の様子は今ではもう何人にも問ふことが出來ぬ。

マタギは東北人及びアイヌの語で、獵人のことであるが、奥羽の山村には別に小さな部落を爲して、狩獵本位の古風な生活をして居る者に此名がある。例へば十和田の湖水から南祖坊に逐はれて來て、秋田の八郎瀉（やし）の主（ぬし）に爲つて居ると云ふ八郎をとこなども、大蛇になる前は國境の山の、マタギの村の住民であつた。

マタギは冬分は山に入つて、雪の中を幾日と無く旅行し、熊を捕れば其肉を食ひ、皮と熊膽を附近の里へ持つて出て、穀物に交易して又山の小屋へ還る。時には峰づたひに上州信州の邊まで、下りて來ることがあると云ふ。

こんな連中でも、用が濟めば我村へ戻り、又山の中でも火を焚き米を煮て食ふ

のに、教員までもしたと云ふ人が、友も無くして何年かの間、此様な忍苦の生活を爲し得たのは、少なくとも精神の異状であつた。而もそれが單なる偶發の事件で無く、遠く離れた國中の山村に、往々にして聞く所の不思議であつたのである。

○
マタギの根原に關しては、現在まだ何人も説明を下し得た者は無いが、岩手秋田青森の諸縣に於て、平地に住む農民たちが、やゝ之を異種族視して居たことは確かである。津輕の人が百二三十年前に書いた奥民圖彙には、一二彼等が奇習を記し、菅江眞澄の遊覽記の中にも、北秋田の山村のマタギの言葉には、犬をセタ水をワツカ、大きいをポロといふの類、アイヌの單語の澤山に用ゐられて居ることを説いてある。

勿論之に由つて彼等をアイヌの血筋と見ることは早計である。彼等の平地人との交通には、言語風習其他に何の障礙も無かつたのみならず、少なくとも近世に

於ては、彼等も村に居る限りは附近の地を耕し、一方には又農民も山家に住む者は、傍ら狩獵に因つて生計を補うた故に、名稱以外には明白に二者を差別すべきものは無いのである。

たゞ關東以西には獵を主業とする者が、一部落を爲す程に多く集まつて居らぬに反して、奥羽の果に行くとマタギの村といふ者が折々ある。熊野高野を始として、靈山開基の口碑には獵師が案内をしたと謂ひ、又は地を献上したと謂ふ例少なからず、それを目して異人仙人と稱して居て、通例の農夫は曾て此物語に參與して居らぬのを見ると、彼等山民の土著が一期だけ早かつたか、又は土著の條件が後世普通の耕作者とは、別であつたかといふことだけは察せられる。

しかも獵に關する彼等の儀式、又信仰には特殊なるものが多い。萬次萬三郎の兄弟が、山の神を助けて神敵を退治し、褒美に狩獵の作法を授けられたなど、いふ古傳も其一例である。東北ではシナの木のことをマダと謂ひ、山民は多く其樹

皮を利用する。マダギ村でも盛に之を採取し又周圍に之を栽培するが、其マダとは關係が無いと謂つて居る。或は二股の木の枝を杖にして、山中を行くやうな宗教上の習慣でもあつて、斯んな名稱を生じたのでは無いかとも思ふが、彼等自身は何と自ら呼ぶかを知らぬから、未だ之を斷定することが出来ぬのである。

八郎といふ類の人が山中に入り、奇魚を食つて身を蛇體に變じたといふ話は、廣く分布して居る所謂低級神話の類であるが、津輕秋田で彼をマダギであつたと傳へたのは、何か考ふべき理由があつたらうと思ふ。

五 女人の山に入る者多き事

天野信景翁の鹽尻には、尾州よこせ小木村の百姓の妻の、産後に發狂して山に入り、十八年を経て後一たび戻つて來た者が有つたことを傳へて居る。裸形にして只腰のまはりに、草の葉を纏うて居たとある。山姥の話の通りであるが、而も當時の事實譚であつた。

此女も或獵人に逢つて、身の上話をしたと云ふ。飢を感ずるまゝに始は蟲を捕つて喰つて居たが、それでは事足らぬやうに覺えて、後には狐や狸、見るに隨ひ引裂いて食とし、次第に力附いて、寒いとも物ほしいとも思はぬやうになつたと語る。一旦は昔の家に還つて見たが、身内の者までが元の自分であることを知らず、怖れて騒ぐのでせん方も無く、再び山中の生活に復つてしまつたと云ふのは哀れである。

明治の末頃にも、作州那岐山なぎのせんの麓、日本原にっぽんがらげの廣戸の瀧を中心として、處々に山姫が出没すると云ふ評判が高かつた。裸にして腰のまはりだけに襤褸を引纏ひ、髪かみの毛は赤く、眼は青くして光つて居た。或時も人里近くに現れ、木こりの小屋を覗いて居る處を見つかり、終にその人夫どもに打殺された。然るにそれをよく調べて見ると、附近の村の女であつて、ずっと以前に發狂して、家出をしてしまつた者であることが分つた。

女には勿論不平や厭世の爲に、山に隠れると云ふことが無い。氣が狂つた結果であることは、其舉動を見れば誰にでも分つた。羽後と津輕の境の田代嶽たしろだけの麓の村でも、若い女が山へ遁げて入らうとするのを、近隣の者が多勢追掛けて、連れて戻らうと引留めて居るうちに、えらい力を出して振切つて、走り込んでしまつたと云ふ話を狩野亨吉先生から承つたことがある。

○

山に走り込んだといふ里の女が、屢々産後の發狂であつたことは、事によると非常に大切な問題の端緒かも知れぬ。古來の日本の神社に從屬した女性には、大神の指命を受けて神の御子を産み奉りし物語が多い。即ち巫女は若宮の御母なるが故に、殊に靈ある者として崇敬せられたことは、頗る基督教などの童貞受胎の信仰に似通うたものがあつた。婦人の神經生理に若し斯様な變調を呈する傾向があつたとすれば、それは同時に亦種々の民族に一貫した、宗教發生の一因子とも考へることを得る。併し勿論物の序などを以て、輕々に取扱ふべき問題では無いから、今は單に一二の類例を擧げて置くに止めるが、其一つは三百餘年前に、因幡國にあつた話で、少し長たらしいが原文のまゝを抄出する。雪窓夜話の上巻に書いてある話である。

寛永年中のこと也。安成久太夫といふ武士あり。備前因幡國換への時節にて、未だ居屋敷も定まらず、鹿野かの（今の氣高郡鹿野町）の在ざいに假に住みけり。或夜山に入り

けるに、月の光も薄く、木立も奥暗き岨陰より、何とも知らぬ者駆け出で、久太夫が連れたる犬を追掛け、遙かの谷に追落して、傍なる巖窟にかけ入りたり。久太夫不思議に思ひ、犬を呼返して其穴に追入れんとするに、犬怖れて入らざれば若黨に命じてかの者を探り求めしむ。人のたけばかりなる猿の如きものなり。若黨引出さんとするに、力強く爪尖りて、若黨の手を搔破りけるを、漸くに引出したり。久太夫葛を用ゐて之を縛り、村里へ引出し、燈をとぼして之を見るに、髪長く膝に垂れ、面相全く女に似て、その荒れたること繪にかける夜叉の如し。何を尋ねても物言ふこと無く、只にこゝと打笑ふのみ也、食を與ふれども食はず水を與ふれば飲みたり。遍く里人に尋ねれども、仔細を知る者無し。一村集まりて之を見物す。其中に七十餘の老農ありて言ふには、昔此村に産婦あり。俄かに狂氣して駆け出でけるが、鷲峰山しうぶせんに入りたり。親族尋ね求むと雖、終に遇ふこと無しと言ひ傳へたり。其年曆を計るに凡そ百年に餘れり。もしは此者にてあらんかと也。久太夫速かに命を助け山に追ひ返しけるに、その走ること甚だ早し。其後又之を見る者無しといへり。

○

佐々木喜善君の報告に、今から三年ばかり前、陸中上閉伊郡附馬牛村つぐもろうしの山中で三十歳前後の一人の女が、殆ど裸體に近い服装に樹の皮などを纏ひ附けて、うろついて居たのを村の男が見つけた。どこかの炭焼小屋からでも持つて来たものか此邊でワツバビツと名ける山辨當の大きな曲げ物を携へ、其中に色々の虫類を入れて居て、あるきながらむしやくと食べて居たと謂ふ。遠野の警察署へ連れて来たが、やはり平氣で蛙などを食つて居るので係員も閉口した。其内に女が臍氣な記憶から、ふと汽車の事を口にし、それから段々に生れた家の模様、親たちの顔から名前を思ひ出し、遂には村の名まで謂ふやうになつたが、聽いて見ると和賀郡小山田村の者で、七年前に家出をして山に入つたといふことがわかつた。や

はり産後であつて、不意に山に入つたといふのであつた。親を警察へ呼出して連れて行かせたが、一時は此町で非常な評判であつた。猶同じ佐々木君の話の中に此附近の村の女の二十四五歳の者が、夫と共に山小屋に入つて居て、終日夫が遠くに出て働いて居る間、一人で小屋に居て發狂したことがあつた。後に落著いてから様子を尋ねて見ると、或時背の高い男が遣つて来て、それから急に山奥へ行きたくなつて、堪へられなかつたと謂つたさうである。

六 山の神に嫁入すと謂ふ事

羽後の田代嶽に駆け込んだと云ふ北秋田の村の娘は、其前から口癖のやうに、

山の神様の處へお嫁入りするのだと、謂つて居たさうである。古來多くの新米の山姥、即ち是から自分の述べたいと思ふ山中の狂女の中には、何か今尙不明なる原因から、斯ういふ錯覺を起して、欣然として自ら進んで、斯んな生活に入つた者が多かつたらしいのである。

さうすると我々が三輪式神話の殘影と見て居る龍婚蛇婚の國々の話の中にも、存外に起原の近世なるものが無いとは言はれぬ。例へば上州の榛名湖に於ては、美しい奥方は強ひて供の者を歸して、しづくと水の底に入つて往つたと傳へ、美濃の夜叉ヶ池の夜叉御前は、父母の泣いて留めるのも聽かず、あたら十六の花嫁姿で、獨り深山の水の神にとついでと謂つて居る。古い昔の信仰の影響か、又は神話が本來斯くの如くにして、發生すべきものであつたのか、兎に角に我民族の是が一つの不思議なる癖であつた。

近頃世に出た「まぼろしの島より」と云ふ一英人の書翰集に、南太平洋はニウへ

ブライズ島の或農場に於て、一夜群衆のわめき聲と共に、頻に鐵砲の音がするの
 で、驚いて飛出して見ると、若い一人の土人が魔神に攫まれて、森の中へ牽いて
 行かれる處であつた。魔神の姿は固より何人にも見えないが、其青年が右の手を
 前へ出して踏止まらうと身をもがく形は、確かに捕はれた者の様子であつた。他
 の土人たちは聲で嚇し、且つ鐵砲を其前後の空間に打掛けて、惡魔を追ひ攘はう
 としたが終に効を奏せず、捕はれた者は茂みに隠れてしまつた。

翌朝其青年は正氣に復して、戻つて常の如く働かうとしたけれども、仲間の者
 は彼が魔神と何か契約をして來たものと疑ひ、畏れ憎んで近づかず、其晩のうち
 に毒殺してしまつたと記して居る。我邦で狐や狸に憑かれたと云ふ者が、其獸ら
 しい舉動をして、傍の者を信ぜしめるのと、最もよく似た精神病の兆候である。

○

猿の聾入といふ昔話がある。どこの田舎に行つても餘り有名である爲に、却つ
 て子供までが顧みようとせぬやうになつたが、實は日本にばかり特別によく成育
 した話で、しかも最初如何なる事情から、こんな珍しい話の種が芽をくむに至つ
 たかは、説明し得た人が無いのである。三人ある娘の三番目が殊に發明で、一旦
 は猿に連れられて山中に入つて行くが、後に才智を以て相手を自滅させ、安全に
 親の家へ戻つて來ることになつて居るのは、もとは明らかに魔界征服譚の一つで
 あつた。今でも落語家の持つて居る王子の狐、或は天狗の羽團扇を欺き奪ふ話な
 ど、同様に、段々に敵の愚かさが誇張せられて、聽く人の高笑ひを催さずには置
 かなかつたのは、武勇勝利の物語に、負けて遁げた者の弱腰を説くのと、目的は
 一つであつて、つまりは猿の聾も怖るゝに足らずといふ教育の、曾て必要であつ
 たことを意味して居る。餅を搗いて臼ながら猿に負はせたり。臼を卸さずに藤の
 花を折らせたり、色々と無理な策略を以て相手を危地に陥れた話があるが、地方
 によつては瓢箪と針千本とを、親から貰ひ受けて出て行つたことになつて居るの

は、即ち蛇神退治の古くからの様式で、猿の方には寧ろ不用なことであつた。變化か混同か何れにしても、龍蛇の聳入の數多い諸國の例が、是と系統の近かつたことだけは察せられるので、たゞ山城蟹旛寺かにぼらの縁起などに於ては、外部の救援が必要であつたに反して、此方はかよわい小娘の智謀一つで、能く自ら葛藤を脱し得た點を、異なれりとするのみである。

大和の三輪の緒環の絲、それから遠く運ばれたらしい豊後の大神おほみか氏の花の本の少女の話は、土地と僅かな固有名詞とをかへて、今でも全國の隅々まで行はれて居るが、終始一貫した發見の絲口は、衣裳の端に刺した一本の針であつた。ところが後世になるにつれて、勝利は次第に人間の方に歸し、蛇の聳は刺された針の鐵氣に制せられ、苦しんで死んだことになつて居る例が多い。絲筋を手繰つて窺かに洞穴の口に近づいて立聽きすると、親子らしい大蛇がひそくと話をして居る。だから留めるのに人間などに思を掛けるから、命を失ふことになつたのだと

一方がいふと、それでも種だけは残して來たから本望だと、死なんとする者が答へる。いや人間は賢いものだ、若し蓬と菖蒲の二種の草を煎じて、それでぎやうすゐ行水を使つたらどうすると、大切な秘密を洩してしまつたことにもなつて居る。たつた一つの小さな昔話でも、段々に源を尋ねて行くと信仰の變化が窺はれる。もとは單純に指命に服従して、怖しい神の妻たることを甘じたものが、後には之を避け又は遁れようとしたことが明らかに見えるのである。しかも或は婚姻慣習の沿革と伴ふものかも知れぬが、猿の聳入の話には後代の蛇聳入譚と共に、娘の父親の約諾といふことが、一つの要件を爲して居る、さうで無くとも堂々と押掛けて來て、一門を承知させたことになつて居て、大昔の神々の如く夜陰密かに通つて來て後に露顯したものでは無かつた。さうして天下晴れて連れて還つたことに話は出來て居る。即ち山と人界との縁組は稀有といふのみで、想像し得られぬ程の事件ではなかつたのが、追々に之を忌み憎むの念が普通の社會には強くなり、百方

手段を講じて其弊害を防ぎつゝ、尙十分なる効果を擧げ得ないうちに、國は次第に近世の黎明になつたのである。

狒ひびといふ大猿が日本にも住むといふことは、もう信ずることが六かしくなつた出逢つた見たといふ話は記事にも畫にも残つて居るものが多いが、注意して見ると、丸々幻覺の産物で無ければ、必ず只の老猿を誤つてさう呼んだ迄である。従つて岩見重太郎、若くは今昔物語のちうさんかうやの如き例は、些しでも動物學の智識を損益する所は無いわけである。しかも昔話にまでなつて此様に弘く傳はつて居るのを見ると、猿の聳入は恐らくある遠い時代の現實の畏怖であつた。少なくとも女性失踪の不思議に對する、世間普通の解釋であつた。どうしてそんな愚かしい事が、信じ得られたかと思ふやうであるが、他に真相の説明が付かなかつた時代だから仕方が無い。一種の精神病といふが如き漠然たる理由では、今日でもまだ承知する者は少ないのである。正月と霜月との月初めの或日を、山の神

の樹かぞへなど、稱して、戒めて山に入らぬ風習は現に行はれて居る。若し此禁を犯せば如何なる制裁があるかと問へば、算へ込まれて樹になつてしまふと謂ふもあれば、山の神に連れて行かれるなども謂つて居る處もある。その山の神様は固より神官の説くが如き、大山祇命では無かつたのである。狼を山神の姿と見た言ひ傳へも多いが、猿は其の一段の人間らしさから、曾ては信仰の對象となつて居た證據も色々ある。中世何等か特別の理由があつて、其地位は動搖したものらしい。其歴史を今少し考へて見ない以上、多くの昔話の意味がはつきりとせぬのも、止むを得ざる次第である。

七 町にも不思議なる迷子ありし事

北國筋の或大都會などは、殊に迷子まひごと云ふものが多かつた。二十年ほど前までは、冬になると一晩として所謂鉦太鼓の音を聞かぬ晩は無い位であつたといふ。山が近くて天狗の多い土地だから、と説明せられて居たやうである。

東京でも以前はよく子供が居なくなつた。此場合には町内の衆が、各一個の提灯を携へて集まり來り、夜どほし大聲で喚んで歩くのが、義理でもあり又慣例でもあつた。關東では一般に、まひ子のくゝ何松やいと繰返すのが普通であつたが上方邊では「かやせ、もどせ」と、稍ゆるりとした悲しい聲で唱へてあるいた。子供にもせよ紛失したものを尋ねるのに、鉦太鼓でさがすといふは實は變なことだが、それは本來搜索では無くして、奪還であつたから仕方が無い。

若し迷子が只の迷子であるならば、斯んな事をしても無益な代りに、大抵は其

日其夜の中に消息が判明する。二日も三日も捜しあるいて、如何しても見付からぬといふのが神隠しで、之に對しては右の如き別種の手段が、始めて必要であつたのだが、前代の人たちは久しい間の經驗に由つて、子供が居なくなれば最初から之を神隠しと推定して、それに相應する處置を執つたものである。

神隠しをする神は如何なる悪い神であつたか。近世人の思想に於ては、必ずしもごく精確に知られては無かつた。通例は天狗てんぐ狗いぬ寶たからといふのが最も有力なる嫌疑者であつたが、それは此様に無造作なる示威運動に脅かされて、取つた兒を又返すやうな氣の弱い魔物とも實は考へられて居なかつた。

狐も亦往々にして子供を取つて隠す者と、考へられて居る地方があつた。さういふ地方では狐のわざと想像しつゝも、やはり盛んに鉦太鼓を叩いたのであるが今では單に狐は暫くの間、人を騙し迷はすだけとして、之を神隠しの中にはもう算へない田舎が、段々に多くなつて行くかと思ふ。近年の狐の惡戯は大抵は高が

知れて居た。誰かゞ行き合せて大聲を出し、又は背中を一つ打つたら正氣が付いたといふ風で、若い衆やよい年輩の親爺までが、夜どほし近所の人々に心配をかけ、朝になつて見ると土手の陰や粟畠のまん中に、きよとんとして立つて居たなどいふことも、亦既に昔話の部類に編入せられようとして居るのである。

併し寂しい在所の村はづれ川端、森や古塚の近くなどには、今でも「良くない處だ」といふ處が折々あつて、その中には悪い狐が居るといふ噂をするものも少なくなは無い。神隠しの被害は普通に人一代の記憶のうちに、三回か五回かは必ず聽く所で、前後の状況は常に略一様であつた。従つて搜索隊の手配路順にも、ほゞ舊來のきまりがあり、事件の顛末も人の名だけが、時々新しくなるばかりで、各地各場合に於て、大した變化を見なかつたやうである。

而も經驗の乏しい少年少女に取つては、是ほど氣味の悪い話はなかつた。私たちの村の小學校では、冬は子供が集まると、いつもこんな話ばかりをして居た。

それで居て奇妙なことには、實際は狐につまゝれた者に、子供は至つて少く、子供の迷子は多くは神隠しの方であつた。

○

子供の居なくなる不思議には、大凡定まつた季節があつた。自分たちの幽かな記憶では、秋の末から冬のかゝりにも、此話があつたやうに思ふが、或は誤つて居るかも知れぬ。多くの地方では舊曆四月、蠶の上簇や麥刈入の支度に、農夫が氣を取られて居る時分が、一番あぶない様に考へられて居た。之を簡明に高麥の頃と名けて居る處もある。つまりは麥が成長して容易に小兒の姿を隠し、又山の獸などの畦づたひに、里に近よるものも實際に多かつたのである。高麥の頃に隠れん坊をすると、狸に騙されると豊後の奥では謂ふさうだ。全く此遊戯は不安心な遊戯で、大きな建物などの中ですらも、稀にはジエネギエバの如き悲惨事があつた。まして郊野の間には物陰が多過ぎた。それが又此戯れの永く行はれた面白

味であつたらうが、幼い人たちが模倣を始めたより更に以前を想像して見ると、忍術など、起原の共通なる一種の信仰が潜んで居て、後次第に面白い村の祭の式作法に爲つたものかと思ふ。

東京のやうな繁華の町中でも、夜分だけは隠れんぼはせぬことにして居る。夜かくれんぼをすると鬼に連れて行かれる。又は隠し婆さんに連れて行かれると謂つて、小兒を戒める親がまだ多い。村をあるいて居て夏の夕方などに、兒を喚ぶ女の金切聲をよく聴くのは、夕飯以外に一つには此畏怖もあつたのだ。だから小學校で試みに尋ねて見ても分るが、薄暮に外に居り又は隠れんぼをすることが、何故に好くないか、小兒はまだ其理由を知つて居る。福知山附近では晩に暗くなつてから隠れんぼをすると、隠し神さんに隠されると謂ふさうだが、それを他の多くの地方では狸狐と謂ひ、又は隠し婆さんなども謂ふのである。隠し婆は古くは子取尼なども謂つて、實際京都の町にもあつたことが、園大曆の文和二年

三月二十六日の條に出て居る。取上げ婆の子取とはちがつて、是は小兒を盗んで殺すのを職業にして居たのである。何の爲にといふことは記して無いが、近世に入つてからは血取とも油取とも名けて、罪無き童兒の血や油を、何かの用途に供するかの如く想像し、近くは南京皿の染附に使ふといふが如き、所謂纈纈城式の風説が繰返された。さうしてまだ全然の無根といふ處まで、突留められては居ないのである。

併し少なくとも此世評の大部分が、一種の傳統的不安であり、従つて話であることは時過ぎて始めてわかつた。例へば迷子が黙つて青い顔をして戻つて來ると生血を取られたからだと解して悲んだ者もあつたが、そんな方法の有得ないことがもう分つて、段々にさうは謂はなくなつた、秩父地方では子供が行方不明になるのを、隠れ座頭に連れて行かれたと謂ひ、又はヤドウカイに捕られたと謂ふさうだが、是などは單純な誤解であつた。隠れ座頭は弘く奥羽關東に亘つて、巖窟

の奥に住む妖怪と信ぜられ、相州の津久井などでは、踏唐臼の下に隠れて居るやうにも謂つて居た。即ち普通の人の眼に見えぬ社會の住民ではあつたのだが、之を座頭としたのは右の如き地底の國を、隠れ里と名けたのが元である。隠れ里本來は昔話の鼠の淨土などの様に、富貴具足の仙界であつて、禱れば家具を貸し金錢を授與したなど、説くのが昔の世の通例であつたのを、人の信仰が變化したから、斯んな恐ろしい怪物とさへ解せられた。多分は座頭の職業に若干の神秘分子が、伴うて居た結果であらう。

それからヤドウカイは又ヤドウケと呼ぶ人もあつた。文字には夜道怪と書いて子取の名人の如く傳へられるが、實は只の人間の少し下品な者で、中世高野聖の名を以て、諸國を修行した法師即ち是である。武州小川の大塚梧堂君の話では、夜道怪は見た者は無いけれども、蓬髮弊衣の垢じみた人が、大きな荷物を背負うてあるくのを、まるで夜道怪のやうだと土地では謂ふから、大方そんな風態の者

だらうとのことである。實際高野聖は行商が片商賣で、いつも強力同様に何もかも背負うてあるいた。さうして夕方には村の辻に立つて、ヤドウカと大きな聲でわめき、誰も宿を貸しましよと言はぬ場合には、又次の村に向つて去つた。旅に摺れて掛引が多く、其上折々は法力を笠に著て、善人たちを脅かした故に、「高野聖に宿かすな、娘取られて耻かくな」など、いふ、諺までも出來たのである。段段斯んな者が村に來なくなつてから、單に子供を嚇す想像上の害敵と爲つて永く残り、その子供が又成人して行くうちに、次第に新しい妖怪の一種に之を算へるに至つたのは、注意すべき現象だと思ふ。我々日本人の精神生活の進化には、斯ういふ村里の隠し神のやうなもの迄が、取残されて居ることは出來なかつたのである。

八 今も少年の往々にして神に隠さるゝ事

先頃も六つとかになる女の兒が、神奈川縣の横須賀から汽車に乗つて來て、東京驛の附近をうろついて居り、警察の手に保護せられた。大都のまん中では、固より小兒の親にはぐれる場合も多かつたらうけれども、幼小な子供が何人にも恠まれずに、斯んなに遠く迄來て居たといふは珍しい。故に昔の人も此等の實例の中で、特に前後の事情の不可思議なるものを迷子と名け、冒贖を忌まざる者は、之を神隠しとも呼んで居たのである。

村々の隣に遠く野山の多い地方では、取分けて此類の神隠しが頻繁で、哀れなることには隠された者の半數は、永遠に還つて來なかつた。私は以前盛に旅行をして居た頃、力めて近代の地方の迷子の實例を、聞いて置かうとしたことがあつた。伊豆の松崎で十何年前にあつたのは、三日ほどしてから東の山の中腹に、一人で立つて居るのを見つけ出した。其處はもう何度と無く、捜す者が通行した筈だのにと、後々まで土地の人が不思議にした。尙それよりも前に、上總の東金とうがね附近の村では、是も二三日してから山の中の薄の叢の中に、しやがんで居たのをさがし出したが、それから久しい間、抜け殻のやうな少年であつたといふ。

珍しい例ほど永く記憶せられるのか。古い話には奇抜なるものが一層多い。親族が一心に祈禱をして居ると、夜分雨戸にどんと當る物が有る。明けて見ると其兒が軒下に來て立つて居た。或は又板葺き屋根の上に、どしんと物の落ちた響がして、驚いて出て見たら、氣を失つて其兒が横はつて居たと言ふ話もある。もつとえらいのになると、二十年もしてから阿呆になつてひよつこりと出て來た。元の四つ身の着物を着たまゝで、縫目が弾けて綻びて居たなど、言ひ傳へた。勿論精確なる記録は少なく、概して誇張した噂のみのやうであつた。學問としての研究の爲には、更に今後の觀察を要するは勿論である。

○
 愛知縣北設樂郡だみね段嶺村 大字豊邦 字笠井島の某と云ふ十歳ばかりの少年が、明治四十年頃の舊九月三十日、即ち神送りの日の夕方に、家の者が白餅しろもちを造るのに忙しい最中、今まで土間に居たと思つたのが、僅かの間に見えなくなつた。最初は氣にもしなかつたが、神祭りを済ましてもまだ姿が見えず、あちこちと見てあるいたが行方が知れぬので、とう／＼近所隣までの大騒ぎとなつた。方々捜しあぐんで一旦家の者も内に入つて居ると、不意におも屋の天井の上に、どしんと何物か落ちた様な音がした。驚いて梯子を掛けて昇つて見ると、少年はそこに倒れて居る。抱いて下へ連れて来てよく見ると、口のまはりも眞白に白餅だらけになつて居た。(白餅といふのは神に供へるしとぎ糰のことで、生の粉を水でかためただけのものである)。氣の抜けたやうになつて居るのを介抱して、色々として尋ねて見ると少年は其夕方に、何時の間にか御宮の杉の樹の下に往つて立つて居た。すると其

處へ誰とも知らぬ者が遣つて来て彼を連れて行つた。多勢の人にまじつて木の梢を渡りあるきながら、處々方々の家をまはつて、行く先々で白餅や汁粉などを澤山御馳走になつて居た。最後にはどこか知らぬ狭い處へ、突込まれるやうにして投げ込まれたと思つたが、それが我家の天井であつたと謂ふ。それからやゝ暫くの間其少年は、氣が疎くなつて居たやうだつたと、同じ村の今三十五六の婦人が話をしたといふ(早川孝太郎君報)。

石川縣金澤市の淺野町で、明治十年頃に起つた出來事である。徳田秋聲君の家の隣家の二十歳ばかりの青年が、ちやうど徳田家の高窓の外に在つた地境の大きな柿の樹の下に、下駄を脱ぎ棄てたまゝで行方不明になつた。是も捜しあぐんで居ると、不意に天井裏にどしんと物の墮ちた音がした。徳田君の令兄が頼まれて上つて見ると、其青年が横はつて居るので、背負うて降してやつたさうである。木の葉を噛んで居たと見えて、口の端を眞青にして居た。半分正氣付いてから仔

細を問ふに、大きな親爺に連れられて、諸處方々をあるいて御馳走を食べて來た又行かねばならぬと謂つて、驅け出さうとしたさうである。尤も常から少し遅鈍な質の青年であつた。其後どうなつたかは知らぬと謂ふ(徳田秋聲君談)。

紀州西牟婁郡上三栖みすの米作といふ人は、神に隠されて二晝夜してから還つて來たが、其間に神に連れられ空中を飛行し、諸處の山谷を經廻つて居たと語つた。食物はどうしたかと問ふと、握り飯や餅菓子などたべた。まだ袂に残つて居ると謂ふので、出させて見るに皆柴の葉であつた。今から九十年ほど前の事である。

又同じ郡岩田の萬藏といふ者も、三日目に宮の山の笹原の中で寢て居るのを發見したが、甚だしく酒臭かつた。神に連れられて攝津の西ノ宮に行き、盆の十三日の晩、多勢の集まつて酒を飲む席にまじつて飲んだと謂つた。是は六十何年前のこと、共に宇井可道翁の璞屋隨筆の中に載せられてあるといふ(雜賀貞次郎君報)。

大正十五年二月の國民新聞に出て居たのは、遠州相良さか在の農家の十六の少年、

夜中の一時頃に便所に出たまゝ戻らず、暫くすると悲鳴の聲が聞えるので、兩親が飛起きて便所を見たが居ない。段々に聲を辿つて行くと、戸じまりをした隣家の納屋の中に、兵兒帶と禪を以て兩手足を縛られ、梁から兎つるしに吊されて居た。早速引卸して模様を尋ねても、便所の前に行つた迄は覺えて居るが、それから先のことは少しも知らぬ。只ふと氣がついたから救を求めたと謂つて居た。奇妙なことには納屋には錠がかゝつて、親たちは捻ぢ切つて入つた。周圍は土壁で何者も近よつた様子が無かつたといふ。警察で尋ねて見たら、今少し前後の狀況が知れるかも知れぬと思ふ。

不意に窮屈な天井裏などに入つて倒れたといふことは、到底我々には解釋し得ない不思議であるが、地方には意外に其例が多い。又沖繩の島にも之と稍似た神隠しがあつて、それを物迷ひ又は物に持たるゝと謂ふさうである。比嘉春潮君の話に依れば、かの島でモノに攫はれた人は、木の梢や水面又斷岸絶壁の如き、普

通に人のあるかぬ處を歩くことが出来、又下水の中や洞窟床下等をも平氣で通過する。人が捜して居る聲も姿もはつきりとわかるが、此方からは物を言ふことが出来ぬ。洞窟の奥や水の中で發見せられた實例も少なくない。斯ういふ狭い場處や危険な所も、モノに導かれると通行が出来るのだが、たゞ其人が屁をひるときはモノが手を放すので、忽ち絶壁から落ちることがある。水に溺れる人には是が多いやうに信じられて居るさうである。備中賀陽かやの良藤と云ふ者が、狐の女と婚姻して年久しく我家の床下に住み、多くの兒女を育て、居たといふ話なども、昔の人には今よりも比較的信じ易かつたものらしい。

九 神隱しに遭ひ易き氣質あるかと思ふ事

變態心理の中村古峽君なども、曾て奥州七戸邊しちのへの實例に就て、調査をせられたことがあつた。神に隱されるやうな子供には、何か其前から他の兒童と、稍ちがつた氣質が有るか否か。是が將來の興味ある問題であるが、私は有ると思つて居る。さうして私自身なども、隱され易い方の子供であつたかと考へる。但し幸にしてもう無事に年を取つてしまつて、さういふ心配は完全に無くなつた。

私の村は縣道に沿うた町並で、山も近くに在るのはほんの丘陵であつたが、西に川筋が通つて奥在所は深く、やはりグレンサンの話の多い地方であつた。私は耳が早くて怖い噂を澤山に記憶して居る兒童であつた。七つの歳であつたが、筋向ひの家に湯に招かれて、秋の夜の八時過ぎ、母より一足さきに其家の戸口を出ると、不意に頬冠りをした屈強な男が、横合から出て來て私を引抱へ、とつ／＼

と走る。怖しさの行止まりで、聲を立てるだけの力も無かつた。それが私の門まで来ると、くゞり戸の脇に私をおろして、すぐに見えなくなつたのである。勿論近所の青年の悪戯で、後にはおほよそ心當りも付いたが、其男は私の母が怒るのを恐れてか、斷じて知らぬと何處までも主張して、結局其事件は不可思議に終つた。宅では兎に角大問題であつた。多分私の眼の色が此刺戟の爲に、すつかり變つて居たからであらうと想像する。

それから又三四年の後、母と弟二人と茸狩に行つたことがある。遠くから常に見て居る小山であつたが、山の向ふの谷に暗い淋しい池があつて、暫く其岸へ下りて休んだ。夕日になつてから再び茸をさがしながら、同じ山を越えて元登つた方の山の口へ來たと思つたら、どんな風にあるいたものか、又々同じ淋しい池の岸へ戻つて來てしまつたのである。其時も茫としたやうな氣がしたが、えらい聲で母親がどなるので忽ち普通の心持になつた。此時の私かもし一人であつたら、恐らくは亦一つの神隠しの例を残したことと思つて居る。

○

是も自分の遭遇ではあるが、あまり小さい時の事だから、他人の話の様な感じがする。四歳の春に弟が生れて、自然に母の愛情注意も元ほどで無く、其上に所謂虫氣があつて、機嫌の悪い子供であつたらしい。其年の秋のかゝりでは無かつたかと思ふ。小さな繪本を貰つて寝ながら見て居たが、頻りに母に向つて神戸には叔母さんが有るかと思ねたさうである。實は無いのだけれども他の事に氣を取られて、母はいゝ加減な返事をして居たものと見える。其内に晝寢をしてしまつたから安心をして目を放すと、暫くして往つて見たらもう居なかつた。但し心配をしたのは三時間か四時間で、未だ鉦太鼓の騒ぎには及ばぬうちに、幸ひに近所の農夫が連れて戻つてくれた。縣道を南に向いて一人で行くのを見て、どこの兒だらうかと謂つた人も二三人はあつたさうだが、正式に迷子として發見せられたの

は、家から二十何町離れた松林の道傍であつた。折よく此邊の新開畠に来て働いて居た者の中に、隣の親爺が居た爲に、直ぐに私だといふことが知れた。どこへ行くつもりかと尋ねたら、神戸の叔母さんの處へと答へたさうだが、自分の今幽かに記憶して居るのは、抱かれて戻つて来る途の一つ二つの光景だけで、其他は悉く後日に母や隣人から聞いた話である。前の横須賀から東京驛まで来た女の兒の話を聞いても、自分は大凡事情を想像し得る。よもや斯んな子が一人で居ることとはあるまいと思つて、驛夫も乗客も却つて之を恠まなかつたのだらうが、外部の者にも諒解し得ず、自身も後には記憶せぬ衝動があつて、斯んな幼い者に意外な事をさせたので、調べて見たら必ず一時性の腦の疾患であり、又體質か遺傳かに、之を誘發する原因が潜んで居たことと思ふ。昔は七歳の少童が庭に飛降つて神恠驚くべき言を發したと云ふ記録が多く、古い信仰では朝野共に、之を託宣と認めて疑はなかつた。そのみならず特に其様な傾向ある小兒を捜し出して、至

つて重要な任務を託して居た。因童(ヨリワラハ)といふものが即ち是である。一通りの方法で所要の状態に陥らない場合には、一人を取圍んで多勢で唱へ言をしたり、又は單調な樂器の音で四方から之を責めたりした。警察などが八釜しくなつて後は、力めて内々に其方法を講じたやうだが、以前は随分頻繁に且つ公然と行はれたものと見えて、今もまゝ事と同様に之を模倣した小兒の遊戯が残つて居る。「中の中の小坊主」とか「かアごめかごめ」と稱する遊びは、正しく其名残である。大きくなつて世の中へ出てしまふと、もう我々の如く常識の人間になつてしまふが、成長の或時期に其傾向が時あつて顯れるのは、恐らくは説明可能なる生理學の現象であらう。神に隠されたといふ少年青年には、注意して見れば何か共通の特徴がありさうだ。さかしいとか賢いとかいふ古い時代の日本語には、普通の兒のやうに無邪氣で無く、何等か稍宗教的ともいふべき傾向をもつて居ることを、包含して居たのでは無いかとも考へる。物狂ひといふ語なども、時代に

よつて其意味は是と畧同じでなかつたかと思ふ。

一〇 小兒の言に由つて幽界を知らんとせし事

運強くして神隠しから戻つて來た兒童は、暫くは氣抜けの體で、大抵は先づぐつすりと寢てしまふ。それから起きて食ひ物を求める。何を問うても返事が鈍く知らぬ覺えないと答へる者が多い。それを又意味有り氣に解釋して、たわいも無い切れ／＼の語から、神祕世界の消息を得ようとするのが、久しい間の我民族の慣習であつた。而も物々しい評判のみが永く傳はつて、本人はと見ると平凡以下のつまらぬ男となつて生きて居るのが多く、天狗のカゲマなど、謂つて人が之を

馬鹿にした。

此連中の見聞談は、若干の古書の中に散見して居る。鋭い眼をした大きな人が來いと謂つたから附いて往つた。どこだか知らぬ高い山の上から海が見えた里が見えたの類の、漠然たる話ばかり多い。處が此とは正反對にごく僅かな例外として、むやみに詳しく見て來た世界を語る者がある。江戸で有名な近世の記録は神童寅吉物語、神界に在つて高山嘉津間と呼ばれた少年の話である。此以外にも平田派の神道家が、最も敬虔なる態度を以て筆記した神隠しの談が幾つかあるが記録の精確なる爲に、愈々談話の不精確なことがよく分る。各地各時代の神隠しの少年が、見て來たと説く所には、何一つとして一致した點が無い。つまりは只其少年の智識經驗と、貧しい想像力との範圍より、少しでも外へは出て居なかつたのである。

故に神道があまり幽冥道を説かぬ時代には、見て來た世界は佛法の淨土や地獄

であつた。續鑛石集の下の巻に出て居る阿波國不朽物語などは其例で、其他にも越中の立山、外南部の宇曾利山で、地獄を見たと言ふ類の物語も、正直な人が見たと主張するものは、すべて皆此系統の話である。

○
黒甜瑣語第一編の卷三に曰く、世の物語に天狗のカゲマと云ふことありて、爰かしこに勾引さるゝあり。或は妙義山に將て行かれて奴となり、或は讃岐の杉本坊の客となりしとも云ふ。秋田藩にてもかゝる事あり。元祿の頃仙北稻澤村の盲人が傳へし不思議物語にも多く見え、下賤の者には別して拘引さるゝ者多し。近くは石井某が下男は、四五度もさはれけり。始は出奔せしと思ひしに、其者の諸器褌袍も残りあれば、それとも言はれずと沙汰せしが、一月ばかりありて立歸れり。津輕を殘らず一見して、委しきこと言ふばかり無し。其後一年ほど過ぎて此男の部屋何か騒がしく、宥して下されと叫ぶ。人々出て見しに早くも影無し。

此度も半月ほど過ぎて越後より歸りしが、山の上にてかの國の城下の火炎を見たると云ふ。諸人委しく其事を語らせんとすれども、辭を左右に托して言はず。若し委曲を告ぐれば身の上にも係るべしとの戒を聞きしと也。四五年を経て或人に從ひ江戸に登りしに、又道中にて行方無くなれり。此度は半年ほどして、大阪より下れりと云ふ。

右の話の始にある不思議物語といふ本は、この他にも澤山の珍しい記事を載せてあるらしい。二百數十年前の盲人の談話ときいて、殊に一度見たいと思つて居る。江戸の人の神に隠された話は、又新井白石も説いて居る。白石先生手簡、年月不明、小瀬復菴に宛てた一通には、次の如く記してある。

正月七日の夜、某舊識の人の奴僕一人、忽に所在を失ひ候。二月二日には、御直參の人にて文筆共當時の英材、某多年の舊識、是も所在を失し、二十八日に歸られ候。其事の始末は、鬼の爲に誘はれ、近く候山々經歷し見候。此外二三人失

せし者をも承り候へ共、それらは某見候者にも無く候。たしかに目撃候間、如此の事また候へば云々(末の方は誤寫があるらしい)。

○

仙童寅吉物語は舞臺が江戸であつたゞけに、出た當時から既に大評判となり、少なからず近世の所謂幽界研究を刺戟した。今でも別様の意味に於て貴重なる記録である。知つて居る人も多いと思ふが、大正十四年の四月に、周防宮市の天行居から刊行した幽冥界研究資料と題する一書は、此類の珍本の幾つかを合せて覆刻して居る。嘉津間答問四卷附録一卷は、即ち前に謂ふ寅吉の談話筆記で、平田翁の手を経て世に公にせられたものであるが、別に其以外に幸安仙界物語三卷、紀州和歌山の或浄土寺の小僧が、白髪のお翁に導かれて屢名山に往來したといふ話であり、仙界眞語一卷は、尾州の藩醫柳田泰治の門人澤井才一郎といふ者が、遠州秋葉山に入つて神になつたといふ一條で、何れも十七歳の青年の異常なる實

験を、最も誠實に記述したものである。高山嘉津間の方は七歳の時から、上野の山下で薬を賣る老人につれられ、時々常陸の或山に往來して居たと語つて居るが實際に居なくなつたのは十四歳の五月からで、十月ほどして還つて来て、いとも饒舌に靈界の事情を語つて居た。遍く諸州を飛行したさうだが、本居は常陸の岩間山の頂上に在つた。紛れも無く天狗山人の社會で、方式にも教理にも修験道の香氣が強かつたが、あの時代の學者たちは一種の習合を以て、自派の神道の闡明に之を利用した。それでも不用意なる少年の語の中には、あまりなる口から出まかせがあつて、指摘し得べき前後の矛盾さへ多かつたのだが、それは記憶の誤りだらう隱すのだらう、或は何か凡慮に及ばぬ仔細があるのだらうと、悉く善意に解しようとした跡がある。非常なる骨折であつた。之に比べると紀州の幸安の神隱しは、三十年餘も後の事であるが、此期間の日本の學問の進歩は、早著しく其話の内容に反映して居る。幸安は先づ和歌山近くの花山といふに登り、それか

ら九州某地の赤山といふ處に往つたと語つたが、赤山の住侶は何れも仙人で、各各雲笈七籤にでもあるやうな高尚な漢名を持つて居た。天狗などは身分の低いものだと、大に之を輕蔑して居る。又支那にも飛べば北亞細亞の山にも往つたとあつて、其叙説の不精確さは正に幕末頃の外國地理の智識であつた。よくも斯んな話が信じられたと、今の人ならば驚くのが當然だが、道教の神秘も日本の固有信仰が之を支配し得るかの如く、曲解し得るだけ曲解するのが、言はゞあの時代の學風であつたので、即ち澤山の夢語りも、やはり平田翁一派の研究以外へは、一足だつて踏出しては居ないのである。

名古屋の秋葉大權現の神異に至つては、話が更に一段と單純になつて居る。是は前にいふ紀州の事件よりも、又十五年も後のことであるが、之に参加した人たちが學問に深入しなかつた故に、古風な民間の信仰の清らさを留めて居る。即ち神隱しの青年は口で喋々と奇瑞を説かなかつた代りに、我々の説明し得ない色々不思議が現はれ、それを見た程の者は一人として疑ひ怪しむことが出来なかつた。さうして多くの信徒の興奮と感激との間に、當の本人は靈魂のみを大神に召されて、若い骸を留めて去つたのである。凡そ近代の宗教現象の記録として、是ほど至純なる資料は實は多くない。身親しく此出來事を見聞いた者の、感を深め信心を新たにすることも、誠に當然の結果のやうに思はれる。唯我々の意外とすることは、斯ういふ珍しい色々の実験を並べて見て、一方が眞實なら他方は誤りでなければならぬ程の不一致には心付かず、幽界の玄妙なる、何の有らざる事あらんやと、一切の矛盾を人智不測の外に置かうとした、後世の學徒の態度であつた。若し盲信で無ければ、是は恐らく同種の偽物に對する寛容であつて、やがては今日の如き鬼術横行の原因を爲したものとも言ひ得られる。

江戸の高山嘉津間、和歌山の島田幸安等の行末はどうであつたか。今なら尋ねて見たらまだ消息が知れるかもしれぬ。若し彼等の行者生活が長く續いて居たと

すれば、此等の覺書類は時の進むと、もに、幾度か其價値を變化して居る筈である。少なくとも口で我々にあんなことを説いて聞かせても、もう今日では耳を傾ける者はあるまい。故に書物になつて残つて居るといふだけで、特段に之を尊重すべき理由は無い道理である。

一一 仙人出現の理由を研究すべき事

「うそ」と「まぼろし」との境は、決して世人の想像する如く、はつきりしたもので無い。自分が考へても尙あやふやな話でも、何度と無く之を人に語り、且つ聴く者が毎に少しも之を疑はなかつたなら、終には實驗と同じだけの、強い印象になつて、後には却つて話し手自身を動かす迄の力を生ずるものだらう。昔の精神錯亂と今日の發狂との著しい相異は、實は本人に對する周圍の者の態度に在る。我々の先祖たちは、寧ろ伶俐にして且つ空想の豊かなる兒童が時々變になつて、凡人の知らぬ世界を見て來てくれることを望んだのである。即ち澤山の神隠しの不可思議を、説かぬ前から信じようとして居たのである。

室町時代の中頃には、若狭の國から年齢八百歳と云ふ尼が京都へ出て來た。又江戸期の終に近くなつてからも、筑前の海岸に生れた女で、長命して二十幾人の亭主を取替へたと云ふ者が、津輕方面に出現した。其長命に證人は無かつたが、兩人ながら古い事を知つてよく語つたので、聴く人は之を疑ふことが出来なかつた。但し其話は申合せたやうに源平の合戦、義經辨慶の行動などの外には出なかつた。それから又常陸房海尊の仙人に爲つたのだと云ふ人が、東北の各地には住んで居た。勿論義經の事蹟、殊に屋島壇の浦高館等、義經記や盛衰記に書いてあ

ることを、あの書をそらで讀む程度に知つて居たので、全く其爲に當時彼が眞の常陸房なることを一人として信用せざる者は無かつたのである。

今日の眼から見れば、之を信ずるのは輕卒のやうであり、欺く本人も憎いやうだが、恐くは本人自身も、常陸房であり、乃至は八百比丘尼なることを、何かわけがあつて固く信じて居たものと思はれる。それも決して有り得ざることでは無い。參河の長篠地方であつたと云ふ狐に憑かれた者は、きつと信玄や山本勘助の話をする。此狐も亦長生で、曾て武田合戦を見物して居て怪我をしたと謂ふ説などが行はれて居た爲に、其後憑かれた者が、皆其合戦を知つて居るやうな氣持にならずには居られなかつたのである。

○ 若狭の八百比丘尼は本國小濱の或神社の中に、玉椿の花を手に持つた木像を安置して居るのみでは無い。北國は申すに及ばず、東は關東の各地から、西は中國

四國の方々の田舎に、此尼が巡遊したと傳ふる故跡は數多く、大抵は樹を栽ゑ神を祭り、時としては塚を築き石を建て、居る。それが單なる偶合で無かつたと思ふことは、どうして其様に長命をしたかの説明にまで、書物を媒介とせぬ一部の一致と脈絡がある。つまりは靈性なる宗教婦人が、曾て巡國をして來たことはあつたので、其特色は驚くべき高齡を稱しつゝ、しかも顔色の若々しかつた點にあつたのである。人は随分と白髮の皺だらけの顔をして居ても、八百と謂へば嘘だと思はぬ者は無いであらうに、兎に角に之を信ぜしめるだけの、術だか力だかは持つて居たのである。それが一人かはた幾人もあつたのかは別として、京都の地へも文安から寶徳の頃に、長壽の尼が若狭から遣つて來て、毎日多くの市民に拜まれたことは、臥雲日件録にも書いてあれば、又康富記などにもちやんと日記として載せてあるから、それを疑ふことは出來ないのである。尤も此時代は七百歳の車僧のやうに、長生を評判にする風は流行であつた。然らば何か我々の想像し

得ない方法が、之を證明して居たのかも知れぬが、何にしても平家物語や義經記の非常な普及が、始めて普通人に年代の智識と、回顧趣味とを鼓吹したのは此時代だから、比丘尼の昔語りは諸國巡歴の爲に、大なる武器であつたこと、思ふ。たゞ自分たちの想像では、單なる作り事では是迄に人は欺き得ない。或は尼自身も特殊の心理から、自分が其様な古い嫗であることを信じ、まのあたり義經辨慶一行の北國通過を、見て居たやうにも感じて居た故に、其の言ふことが強い印象と爲つたのでは無からうか。越中立山の口碑では、結界を破つて靈峯に登らうとした女性の名を、若狭の登宇呂の姥と呼んで居る。若し此類の山で修行した巫女が自身にさういふ長命を信じて居る習ひであつたら、後に説かうとする日向小菅嶽の山女が、山に入つて數百年を経たと人に語つたといふのも、必ずしも作り話では無いことになるのである。やたらに人の不誠實を疑ふにも及ばぬのである。

○

常陸坊海尊の長命といふことは、今でもまだ陸前の青麻あまの權現の信徒の中には、信じて居る人が大分あつて、之を疑つては失禮に當るか知らぬが、實は此信仰には明かに前後の二期があつて、其後期に於ては海尊さまはもう人間では無かつたのである。之に反して足利時代の終りに近く、諸國に此人が生きて居たと謂ふ話の多いのは、正しく八百比丘尼と同系統の現象であつた。事の序に少しくあの頃の世間の噂を比較して見ると、例へば會津の實相寺の二十三世、桃林契悟禪師號は殘夢、別に自ら秋風道士とも稱した老僧は其一人であつた。和尚は奇行多く、又好んで源平の合戦其他の舊事を談ずるに、恰かも自身其場に居て見た者の如くであつた。無々と言ふ老翁の石城郡に住する者、曾て殘夢を訪ねて來て、二人で頻りに曾我の夜討の事を話して居たこともあつた。しかも曾我とか源平合戦とか、もうちやんと書物になつて居ることを知らず、あまり詳しいので喫驚するやうな人が、まだ此地方には多かつたらしいのである。年を尋ねると百五六十と答へ、

強ひて問ひつめると却つて忘れたと謂つて教へなかつた。然らば常陸坊海尊だらうと噂したと謂ふのは、恐らくは此頃既にかの仙人がまだ生きて何處かに居るやうに、評判する者があつたからであらう。又別の傳へには福仙と云ふ鏡研ぎが來た。殘夢之を見て彼は義經公の旗持ちだつたと謂ふと、福仙も亦人に向つて、殘夢は常陸坊だと告げたとも謂ふが、そんな事をすれば露れるにきまつて居る。しかも和尚は天正四年の三月に、たくましい一篇の偈を留めて圓寂し、墓も其寺に在るに拘らず、其後尙引續いて常陸坊が生きて居るといふ説は行はれた。本朝故事因縁集には、海尊遁げ去りて富士山に入る、食物無し、石の上に飴の如き物多し、之を取りて食してより又飢うるること無く、三百年の久しき木の葉を衣として住む。近代信濃の深山に岩窟あり、之に遊びて年末だ老いずとある。山に居りさりの仙人ならば、斯んな歴史も傳はらぬ道理で、やはり時々は若狭の尼のやうに人間の中に入つて來て居たのである。能登の狼煙村のつしの山伏山では、常陸坊はこの

地まで來て義經と別れ、仙人になつて此山に住んだ、折々は山伏姿で出て來たと能登國名跡志に書いてあるが、それでは高館衣川こつもがはの昔話をするのに、甚だ勝手が惡かつたわけである。加賀には殘月といふ六十ばかりの僧、曾て犀川と淺野川の西東に流れて居た時を知つてると謂つた。越後の田中と云ふ地に來て、小松原宗雪なる者と同宿し、穀を絶ち松脂を服して暮して居たが、誰言ふとも無く殘月は常陸坊、小松原は龜井六郎だと評判せられた。人が義經記を讀んで聽かせると、覺えず釣込まれて其頃の話をしたと提醒紀談卷一にあるが、龜井と馬が合うたとすれば、能登で別れてしまつたのでは無ささうだ。廣益俗說辯卷十三には、海尊高館の落城に先つて山に遁れ、仙人と爲つて富士淺間湯殿山などに時々出現するとあるが、羽前最上郡古口村の外川神社の近くにも、海尊仙人が住んで居たといふ口碑あり又陸前氣仙郡けせんの唐丹とうにの觀音堂の下にも、昔常陸坊が松前から歸りがけに此地を通つて、是は龜井の墓だと別當山伏の成就院に、指さし教へたと傳ふる

墓があつた。永い年月には何處へでも往つたらうが、それにしても餘りに口が多く、又話が少しづつ喰違つて居るのは、やはり澤山の同名異人があつた爲では無かつたか。殊に寛永の初年に陸中平泉の古戰場に近い山中で、仙臺の藩士小野太左衛門が行逢うたといふのは、よほど怪しい常陸坊であつた。源平時代の見聞を語ることに、親しく之を歴た者の通りであつた故に、小野は直ちに海尊なることを看破し、就いて兵法を學び、又恭しく延年益壽の術を訊ねた。異人答へて曰くもと修するの法無し、曾て九郎判官に隨從して高館に居るとき、六月衣川に釣して達谷たつこくに入る。一老人あり招きて食を供す。肉あり其色は朱の如く味美なり、仁羹と名く。従者恠みて食はず、之を携へて歸る。其女子之を食ひ亦不死であつたが、天正十年まで居て何れへか往つてしまつたと語つた。此話は若狹越中其他の地方に於て、八百比丘尼の長生の理由として、語り傳ふるものと全然同じで、仁羹は即ち人魚の肉であつた。日本の仙人が支那のやうに技術の力で無く、到底習

得し難い身の運のやうなものを具へて居たことを、説明しようとする昔話に過ぎぬのだが、是をさへ受賣するからには仙翁でも無かつたのである。然るにも拘らず、小野太左衛門は其説に感歎して、之を主人の伊達政宗に言上し、後日に清悦御目見えの沙汰があつた。清悦とはこの自稱長壽者の後の名で、現行はれて居る清悦物語の一書は、彼が義經記を一讀して是は違つて居ると謂ひ、自ら口授した所の源平合戦記であつた。吾妻鏡や鎌倉實記と比較して、一致せぬ點が多いと云ふのは當り前以上である。併し出來事の評判は非常であつたと見えて、寛永以後尙久しい間、清悦の名は農民の頭から消えなかつた。岩切の青麻權現の岩窟に出現したのは、それから凡そ五十年の後、ちやうど清悦物語が世に出てから、十五年目の天和二年であつたと謂ふ。鈴木所兵衛といふ信心深い盲人が、彼に教へられて天に禱り、目が聞いたといふ奇跡もあつた。其時は氣高い老人の姿で現れて、吾は常陸坊海存、今の名は清悦である。久しく四方を巡つて近頃下野の大日

窟に居たが、是からは爰へ来て住まう。此窟には何神を祭つてあるかと尋ねるので、大日不動虚空藏の三尊だと答へると。それは幸ひのことだ、自分の念ずるのも日月星、今より三光穴と名くべしと謂つて、乃ち岩窟に入つて鐵鑊を以て上下した。是が人魚を食べた常陸坊の、又新たなる變化であつた。但し此縁起はそれから更に八十餘年を経て、再び此社が繁昌した後のもので、以前の形の儘か否かは疑はしい。近年になつては一般に、常陸坊は天狗だと信じられて居た。常陸國の阿波あはの大杉大明神も、此人を祭るといふ説があり、特別の場合の他は姿を見ることが出来なかつた。しかも一方には因縁が尙繋がつて、折々は昔の常陸坊かも知れぬといふ老人が、依然として人間にまじつて遊んで居た。

話が長過ぎたがやはり附添へて置く必要がある。青麻權現の奇跡と同じ頃に、同じ仙臺領の角田かくたから白石しろいしの邊にかけて、村々の舊家に寄寓してあるいた白石翁といふ異人があつた。身のたけ六尺眼光は流電の如く、又中々の學者で神儒二道

の要義に通じて居た。此翁の特徴は紙さへ見れば字をかくこと、それから亦源平の合戦を談ずることとであつた。年齢は言はぬが誰を見てもセガレと呼び、角田の長泉寺の天鑑和尚などは、百七つまで長命したのに、やはりセガレを以て交つて居た。或時象棋をさして居て、ふと曲淵正左衛門の事を言ひ出したが、此人は二百年前に居た人であつた。身元が知れぬので色々の風説を生じ、或は甲州の山縣昌景かと謂ひ、信玄の次男の誓聖堂の子かとも謂ひ、或は又清悦であらうとも謂つた。元祿六年の二月十八日に、白石在の某家でたしかに病歿したのだが、それから十何年の後、或商人が京都に旅行して、途中で白石翁を見たといふ話も傳はつて居たから、假に海尊であつたとしても理窟だけは合ふのである(以上、東藩野乗下巻及び封内風土記四)。

さて此等の話を集めて見て、結局目に立つのは常に源平の合戦を知つて居ることが、長命の證據になつたといふ點である。東北地方の舊家の殊に熊野神社と關

係ある者は、最も辨慶や鈴木龜井の武勇談を愛好し、成るだけ多く聴きたいといふ希望が、終に義經記の如き地方の文學を成長せしめたのだ。是に新材料を供與する人ならば、異常の尊敬を受けたのは當然である。それも作り事と名乗つては人が承知せぬのが普通であつた。即ち座頭の坊の物語が夙くから、當時實際に參與した勇士どもの靈の、託言又は啓示なることを要した所以である。常陸坊は高館落城の當時から、行方不明と傳へられて居た故に、後日生靈となつて人に憑くに差支は無く、又比較的重要でない法師であつて、觀て居た様子を語るには都合がよかつた。だから一時的には吾は海尊と名乗つて、實歴風に處々の合戦や旅行を説くことは、何れの盲法師も昔は通例であつたかと思ふが、それが餘りに巧妙で傍の者が本人と思つたか、はた又本人までが常陸坊になりきつて、所謂見て來たやうな嘘をついたかは、今日となつてはもう斷定が出來ぬ。それから第二の點は支那の寒山拾得の話の如く、殘夢は無々と語り福仙と相指ざし、殘月は小松原

宗雪と同宿し、清悅は小野某を伴ひ、又白石翁が天鑑和尚を悴と呼んだこと、是も多分は古くからの方式であつたらうと思ふ。陸中江刺郡黒石の正法寺で、石地藏が和尚に告げ口をした爲に、常陸かいどうの身の上が露れた。歸りに其前を通ると地藏がきな臭いやうな顔をしたので、さてはこやつが喋つたかと、鼻をねぢたと謂つて鼻曲り地藏がある。是は紛れも無く海神の宮の口女であり、又猿の肝の昔話の龍宮の海月であつて、斯ういふ者が出て來ないと、やはり話にはなりにくかつたのである。だから眼前のたゞ一つの例を執つて、不思議を説明しようとするのは誤つた方法である。近くは天明の初年に上州伊香保の木樵、海尊に傳授を受けたと稱して、下駄灸といふ療治を行つたことが、翁草の卷百三十五にも見えて居る。彼も福仙と同じく義經の旗持ちであつたのが、此山に入つて自分も亦地仙と爲つたと謂ふ。下駄だの灸だのといふ近代生活にまで、尙昔の奥淨瑠璃の年久しい影響が、痕を留めて居るのはなつかしいと思ふ。

一二 大和尚に化けて廻國せし狸の事

話が山から出て來たついでに、をかした先例を今少し列舉して見たい。關東各府縣の村の舊家には、狐や狸の書いた書畫と云ふものが折々傳はり、之に伴うて必ず不思議な話が残つて居る。大抵は旅の僧侶に化けて、其土地に暫く止まつて居たと云ふのである。どうして其僧の狸であることを知つたかと言へば、後日少しくかけ離れた里で、狗に噛殺されたと云ふ話だからと謂ふものと、其僧が滞在をして居る間、食事と入浴に人の居るのをひどく厭がる。そつと覗いて見たら食物を膳の上にあけて、口を付けて食べて居たからと謂ふのがあり、又湯殿の湯氣の中から、だらりと長い尻尾が見えたからと謂ふのもある。書や畫は多くは亂暴な、しかも活潑な走り書きであつた。

この化の皮の露れた原因として、狗に殺されたは如何にも實際らしく無い。若し噛まれて死んで居たもの、正體が狸であれば、果してあの和尚か否かわからず、和尚の姿で死んで居れば、狸とは尙更言はれない。要するに山芋と鰻、雀と蛤との関係も同じで、立會の上で甲から乙へ變化する所を見届けぬ限は、眞の調書は作成し得なかつた道理である。恐らくは實は和尚の舉動、或は其の内々の白狀が、此説の基礎を爲したものであつたらうと思ふ。

所謂狸和尚の話は、鈴木重光君の相州内郷村話の數頁が、最も新しく且つ注意深い報告である。同君の居村附近、即ち小佛峠を中心とした武相甲の多くの村には、天明年間に貉むじなが鎌倉建長等の御使僧に化けたと云ふ話と共に、描いて残した書畫が多く分布して居る。鈴木君が自身で見たものは、東京府南多摩郡加住村大字宮下にある白澤はくたくの圖、神奈川縣津久井郡千木良村ちぎらに傳はる布袋川渡りの圖であつたが、後者は布袋らしく福々しい所は少しも無く、何と無く貉に似た顔に出來

て居た。書は千木良の隣の小原町の本陣、清水氏にも一枚あつた。形は字らしいが何といふ字か判らなかつた。それよりも更に奇怪なことは、此僧が狗に噛み殺されて、貉の正體を顯したと傳ふる場處が、或は書畫の數よりも多いかと思ふ位方々の村に在ることである。又建長寺の方でも此事件は否定せぬさうだ。但し貉が勸化の使僧を噛み殺して、代つて之に化けたと云ふかち／＼山式風説は認めず中途で遷化した和尚の姿を借りて、山門再建の遺志を果したといふ他の一説の方を執つて居り、現に寺にも其貉の書いたものが、二枚も藏つてあるといふのは、頗る次に述べる文福茶釜の話と似て居る。

右と同様の話は尙澤山あるが、今記憶する二つ三つを舉げて見ると、静岡縣安倍郡誌には、此郡大里村大字下島の長田氏には、是も建長寺の和尚に化けて、京に上ると稱して堂々と行列を立て、乗込んで來たといふ貉があつて、其書が今に残つて居る。横物の一軸に、「悝」といふやうな變な字が一字書いてある。ムジナ

即ち狸だといふ幽かな暗示とも解せられる。隣區西脇の庄屋萩原氏にも宿泊し、かの家にも一枚あつたがそれは紛失した。さうしてやはり後に安倍川の川原で、犬に喰殺されたと傳へられる。信州下伊那郡泰阜村やすをかの温田ぬくたと云ふ處にも、狸のゑがくといふ繪像のあることが、「傳説の下伊那」といふ書に報ぜられてある。人の顔に獸の體を取附けたやうな不思議な畫姿であつたと謂ふ。但し是は和尚では無くて、由ある京都の公家といふ觸込で、遠州路から山阪を越えて此村に遣つて來て泊つた。出入ともに駕籠の戸を開かず、家の者も見ることが得なかつたが、翌朝出發の時に禮だと稱して、斯んな物を置いて去つたと謂ふ。此狸はそれから柿野といふ部落に入つて同じことをくりかへし、段々と天龍筋を上つて行くうちに上穂うはほの光善寺の飼犬に正體を見現はされ、噛み殺されてしまつたと謂ふが、その光善寺の犬は例のヘイボウ太郎で、遠州見附の人身御供問題を解決した物語の主人公だから、どこまでが昔話か結局は不明に歸するのである。

蕉齋筆記には又次のやうな話が出て居る。三州龜濱の鳴田又兵衛といふ富人の家へ、安永の初年頃に、京の大徳寺の和尚だといふのがたゞ一人でふらりと遊びに来て、物の三十日ほど滞在し、頼まれて額だの一行物だのを、幾らとも無く書いて還つた。あとから挨拶の状を京に上せると、大徳寺の方では和尚一向にそんな覚えが無いとある。但しもと此寺に一匹の狸が居て、夜分椽先に來て法談を聽聞して居たが、後に和尚の机の上から石印を盗んで何れへか往つてしまつた。其奴では無からうかと謂つて居ると、果して後日の噂には江州大津の宿で、駕籠を乗替へようとして犬に喰殺された狸だか和尚だか、其石印を所持して居たさうである。三州の方には屏風が一つ残つて居た。見事な筆跡であつたと謂ふ。併し是だけの材料を綜合して、狸が書家であつたと断定することは容易で無い。やはり最初から、旅僧の中には稀には狸ありといふ風説が、下染をなして居る必要はあつたのである。狐の書といふ話も例は多いが、鹽尻(帝國書院本)の卷六十八及

び七十五にも、これと半分ほど似た記事がある。美濃安八郡春近の井上氏に、傳へた書といふのがそれであつて、其模寫を見ると鳥啼花落と立派に書いて、下に梅菴と署名してある、本名は板益亥正、年久しく井上家の後園に住む老狐であつて、屢々人間の形を以て來訪した。筆法以外醫道の心得もあり、又能く禪を談じたが、一旦中絶して行方が知れず、どうした事かと思つて居ると、或時村の者が京に上る途で、是も大津の町で偶然にこの梅菴に行逢うた。もう年を取つて死ぬ日が近くなつた。日頃親しくした井上氏と、再會の期も無いのは悲しいと落涙し一筆認めて之を托し、尙井上が子供にもよく孝行をして學問を怠らぬやうにと、傳言を頼んで別れたさうである。梅菴は野狐にして僧、長齋一食なりとあつて、何だか支那の小説にでもありさうな話だが、現に鳥啼花落が遺つて居るのだから仕方が無い。併し宮川舍漫筆卷三には、早同じ話に若干の相違を傳へ、公表せられた狐の書といふものにも、野干坊元正と麗々と署名がしてあつた。

實際此類の狐になると、果して人に化けたのやら、若くは人の形になり切つて居るのやら、其境目がもうはつきりしては居なかつた。それ故に却つて本人の方から、假令露骨には名乗らぬ迄も、稍自分の狐であることを、暗示する必要があつたと見える。空菴といふ狐が自ら狐の一字を書いたことは一話一言に在り、又駿州安倍郡の貉は狸といふ字に紛はしい書を遺した。しかも他の一方に於ては、人が狐に化けたといふ話も近世は存外に多かつた。物馴れた旅人が狐の尻尾を腰さげにして、わざとちら／＼と合羽の下から見せ、駕籠屋馬方宿屋の亭主に、尊敬心を起させたと云ふ噂は興味を以て迎へられ、甚だしきはあべこべに、狐を騙したといふ昔話さへ出来て居る。だから私は村々の狸和尚が、何れも狸の贋物であつたとは勿論言はぬが、少なくとも如何して之を發見したかは、考へて見る必要があると思ふのである。

狐狸の大多數が諸國を旅行する際に、武士にも商人にもあまり化けたがらず、大抵和尚や御使僧になつて來たのも曰くがあらう。上州茂林寺の文福茶釜を始として 曾て異僧が住してそれが實は狸であり、色々寺の爲に働いて、後に居なくなつたと謂ふのみならず、何か末世の手證となる物を、遺して往つたといふ例は澤山にある。禪宗の和尚たちは之を怪奇として斥けず、寧ろ意味ありげに語り傳へるのが普通であつた。會津の或寺でも守鶴西堂の天目を什寶とし、稀有の長壽を説くこと常陸坊海尊同様であつたが、その守鶴もやはり何かの序に微々として笑つて、頗る自己の實は狸なることを、否定しなかつたらしい形がある。東京の近くでは府中の安養守に、曾て三世の住職に隨逐した筑紫三位といふ狸があつて、それが書いたといふ寺起立の由來記を存し、横濱在の關村の東樹院には、狸が描くと稱する渡唐天神の像もあつた(新篇風土記稿二十四及び二十八)。建長寺ばかりでは無いのである。

それから又有用無害の狐狸が居たと云ふ話は、今では多く寺々の管轄の下に歸

し、且は佛徳の如是畜生に及んだことを證して居るやうだが、最初は其全部が僧たちの親切に基いた因縁話でも無かつたらしい。今日の思想から判ずれば、狐は是れ人民の敵で、人は彼々乎として其害を避くるに専らであるけれども、祭つた時代には色々の好意を示し、亦必ずしも佛法の軌範の内に踰踏して居なかつた。例へば越後の或山村では、正月十五日の宵に山から大きな聲を出して、年の吉凶を豫言し、又は住民の行爲を批判した。東備郡村誌に依れば、岡山市外の圓城村に老狸あり、人に化けて民間に往來し、能く人の言語を學んで屢々附近の古城の話をした。其物語を聽かんと欲する者、食を與へて之を請ふ時んば、一室を鎖して其内に入り、惇々として人の如くに談じた。而うして人を害すること無し、尤も恠獸なりとある。三河の長篠のおとら狐に至つては、近世其暴虐殊に甚だしく住民は悉く切齒扼腕して居るのだが、人に憑くときは必ずとびのすじやう鳶巢城の故事を談じ、尙進んでは山本勘助の智謀、川中島の合戦の如き、今日の歴史家が或は小幡勘兵衛の馱法螺だらうと考へて居る物語までを、事も細かに叙述するを常とした。單に人を惱ます者がおとらであり、おとらは歳久しき狐なることを證明する爲ならば、それ程力を入れずともよいのであつた。恐らくは是も昔は其話を聽く爲に、狐を招いて來て貰つた名残であつて、同時に又諸國の狸和尚、乃至は常陸坊八百比丘尼の徒が、或は自分も亦多くの聽衆と同じく、憑いた生靈、憑いた神と同化してしまつて、莊子の夢の吾か蝴蝶かを、差別し得ない境遇に在つた結果では無いかを考へしめる。

○
近頃でも新聞に毎々出て來る如く、醫者の少しく首を捻るやうな病人は、家族や親類が直ぐに狐憑きにしてしまふ風が、地方によつてはまだ盛んであるが、何ぼ愚夫愚婦でも理由も無しに、そんな重大なる斷定をする筈が無い。大抵の場合には今までも似たやうな先例があるから、若しか例のでは無いかと、以心傳心に

内々一同が警戒して居ると、果せるかな今日は昨日よりも、一層病人の舉動が疑はしくなり、先づ食物の好みの小豆飯油揚から、次には手つき眼つきや横著なそぶりとなり、此方でも「こんちきしょう」など、謂ふ迄に激昂する頃は、本人も亦堂々と何山の稻荷だと、名を名乗るほどに進んで來るので、要するに双方の相持ちで、若し之を精神病の一つとするならば、患者は決して病人一人では無いのだ狸の旅僧の如きも多勢で寄つてたかつて、化けたと自ら信ぜずには居られぬ様に逆に只の坊主を誘導したのかも知れぬ。

佐渡では新羅王書と署名した奇異なる草體の書が、多くの家に藏せられ、私もその幾つかを見た。古い物ではあるが、勿論新羅と云ふ國が滅びて後、既に四五百年以上もしてから作に相異無い。天文年間に漂着したとも謂ひ、或はもつと後の事とも謂つて居る。兎に角曾て他處から來た實在の異人であつた。後には土地の語を話し、土地の人になつてしまつた。書ばかり書いて居る變な人だつたと云ふが、現に其子孫といふ家もあつて、兎に角に詐欺師では無かつた。自分でも新羅王だと思つて居り、それを又周圍の人が少しも疑はなかつた爲に、此様な有り得べからざる歴史が成立つたものである。

神隱しの少年の後日譚、彼等の宗教的行動が、近世の神道説に若干の影響を與へたのは恠しむに足らぬ。上古以來の民間の信仰に於ては、神隱しは亦一つの肝要なる靈界との交通方法であつて、我々の無窮に對する考へ方は、終始この手續を通して進化して來たものであつた。書物からの學問が漸く盛なるにつれて、此方面は不當に馬鹿にせられた。さうして何が故に今尙我々の村の生活に、斯んな風習が遺つて居たのかを、説明することすらも出來なくならうとして居る。それが自分の此書物を書いて見たくなつた理由である。

一三 神隠しに奇異なる約束ありし事

神隠しから後に戻つて來たと云ふ者の話は、更に悲しむべき他の半分の、不可測なる運命と終末とを考へる材料として、尙忍耐して多く之を蒐集する必要がある。社會心理學といふ學問は、日本ではまだ翻譯ばかりで、國民の爲の研究者は何時になつたら出て來るものか、今はまだ些しの心當ても無い。それを待つ間の退屈を紛らす爲に、兼て集めてあつた二三の實例を槩として、自分はほんの少しばかり、尙奥の方へ入込んで見ようと思ふ。最初に注意せずに居られぬことは、我々の平凡生活に取つて、神隠し程異常なる且つ豫期しにくい出來事は他に無いにも拘らず、單に存外に頻繁であり又どれも是もよく似て居るのみで無く、別に尙人が設けたので無い法則の如きものが、一貫して存するらしいことである。例へば信州などでは、山へ天狗に連れて行かれた者は、跡に履物が正しく揃へてあ

つて、一見して普通の狼藉、又は自身で身を投げたりした者と、判別することが出來ると謂つて居る。そんなことは信じ得ないと評してもよいが、問題は何故に人が其様なことを言ひ始めるに至つたかに在る。

或は又二日とか三日とか、一定の期間捜して見て見えぬ場合に、始めて之を神隠しと推斷し、それからは又特別の方法を講ずる地方もある。七日を過ぎて猶發見し得ぬ場合に、最早還らぬ者として其方法を中止する風もある。或は又山の頂上に登つて高聲に兒の名を呼び、之に答ふる者あるときは其兒何れかに生存すと信じて、辛うじて自ら慰める者がある。八王子の近くにも呼ばり山といふ山があつて、時々迷子の親などが、登つて呼び叫ぶ聲を聴くといふ話もあつた。町内の附合ひ又は組合の義理と稱して、各戸總出を以て行列を作り、一定の路筋を廻歴した慣習の如きも、之を個々の事變に際する協力と謂はんよりは、頗る葬禮祭禮などの方式に近く、しかも捜査の目的に向つては、必ずしも適切なる手段とも思

はれなかつた。此仕來りには恐らくは忘却せられた今一つ根本の意味があつたのである。それを考へ出さぬ限りは、神隠しの特に日本に多かつた理由も解らぬのである。

○

全體に此實例は追々と少なくなつて、今では話ばかりが尙鮮明に残つて居る。神隠しといふ語を用ゐぬ地方も既にあるが、狐に騙されて連れて行かれると謂ひ又は天狗にさらはれると謂つても、之を搜索する方法は略同じであつた。單に迷子と名けた場合でも、やはり鉦太鼓の叩き方は、コンコンチキチコンチキチの囃子で、芝居で釣狐などいふものゝ外には出でなかつた。しかも其以外に尙叩く物があつて、各府縣の風習は互ひによく似て居たのである。例を以て説明するならば、北大和の低地部では、狐にだまされて姿を隠した者を搜索するには、多人數で鉦と太鼓を叩きながら、太郎かやせ子かやせ、又は次郎太郎かやせと合唱し

た。この太郎次郎は子供の實名とは關係なく、いつも斯う謂つて喚んだものらしい。さうして一行中の最近親の者、例へば父とか兄とかは、一番後に下つて附いて行き、一升枴を手に持つて、其底を叩きながらあるくことに定まつて居り、さうすると子供は必ず先づ其者の目につくと謂つて居た(なら、一八號)。紀州田邊地方でも、鉦太鼓を叩くと共に、櫛の齒を以て枴の尻を搔いて、變な音を立てる風があつた(雜賀君報)。播磨の印南郡では迷子を搜すのに、村中松明をともし金盞などを叩き、オラバオ／＼と呼はつてあるが、別に一人だけわざと一町ばかり引下つて、枴を持つて木片などで叩いて行く。さうすると狐は隠して居る子供を、枴を持つ男のそばへほうり出すと謂つて居た。同國東部の美囊郡などでは、迷子は狐で無く狗賓さんに隠されたと謂ふが、やはり搜しにあるく者の中一人が、其子供の常に使つて居た茶碗を手に持つて、それを木片を以て叩いてあるいた。越中魚津でも三十年餘の前までは、迷子を探すのに太鼓と一升枴とを叩いてあるい

た。楯の底を叩くと天狗さんの耳が破れさうになるので、捕へて居る子供を樹の上から、放して下すものだと信じて居たさうである(以上、土の鈴九及び一六)。

右の如き類例を見て行くと、誰でも考へずに居られぬことは、今も多くの農家で茶碗を叩き、又飯櫃や楯の類を叩くことを忌む風習が、随分廣い區域に亘つて行はれて居ることである。何故に之を忌むかといふ説明は一様で無い。叩くと貧乏する、貧乏神が來るといふもの、他に、此音を聽いて狐が來る、オサキ狐が集まつて來ると謂ふ地方も關東には多い。多分はずつと大昔から、食器を叩くことは食物を與へんとする信號であつて、轉じては此類の小さな神を、招き降す方式となつて居たものであらう。従つて一方では矢鱈に其真似をすることを戒め、他の一方では亦此方法を以て兒を隠す神を喚んだものと思ふ。俵藤太が持つて來た龍宮の寶物に、取れども盡きぬ米の俵があつて、後に子孫の者が其俵の尻を叩くと白い小蛇が飛出して米が盡きたと稱するの、若し別系統でなければ同じ慣習

の變化だとしてよろしい。何れにしても迷子の鉦太鼓が、其子に聽かせる目的で無かつたことだけは、かやせ戻せといふ唱へ言からでも、推定することが難くないのである。

○

加賀の能美郡なども、天狗の人を隠した話の多かつたことは、近年刊行した能美郡誌を見るとよくわかる。同じ郡の遊泉寺村では、今から二十年ほど前に伊右衛門といふ老人が神隠しに遭つた。村中が手分けをして捜しまはつた結果、部隣落と地境の小山の中腹、土地で神様松と謂ふ傘の形をした松の樹の下に、青い顔をして坐つて居るのを見付けたと謂ふ。然るに村の人たちが此老人を探しあるいた時には、鯖食さばつた伊右衛門やいと、口々に唱へたと云ふ話だが、是は何時でもさう言ふ習はしで、神様殊に天狗は最も鯖が嫌ひだから、斯う謂へば必ず隠した者を出すものと信じて居たのである(立山徳治君談)。琉球で物迷ひと名けて物に隠され

た人を探すのにも、部落中の青年は手分けをして、森や洞窟などの中を棒を持ち銅鑼を叩き、どこそこの誰々やい、赤豆飯あかまめまいを食へよと大きな聲で呼びまはると謂ふ。よく似た話だが是も神靈が之を惡むのか否かは分らぬ。内地の小豆飯は寧ろ此類の神の好む所と考へられて居る。鯖といふ魚の信仰上の地位は、詳かに調べて見る必要があるのだが、今までは誰も手を著けて居なかつた。

不思議な事情から居なくなつてしまふ者は、決して少年小兒ばかりでは無かつた。數が少なかつたらうが成長した男女も亦隠され、さうして戻つて來る者も甚だ僅かであつた。但し壯年の男などはよく／＼の場合で無いと、人は之を驅落ち又は出奔と認めて、神隠しとは謂はなかつた。神隠しの特徴としては永遠に居なくなる以前、必ず一度だけは親族か知音の者に、ちらりと其姿を見せるのが法則である様に、殆ど何れの地方でも信じられて居る。盆とか祭の宵とかの人込の中

で、ふと行きちがつて言葉などを掛けて別れ、をや今の男は此頃居ないと謂つて家で騒いで居た筈だがと心付き、直ぐに取つて返して跡を追うて見たが、もうどこへ行つても影も見えなかつた。と云ふ類の例ならば方々に傳へられて居る。是等は察する所、樹下にきちんと脱ぎそろへた履物など、一様に、如何に若い者が氣紛れな家出をする世の中になつても、尙其中には正しく神に召された者が有り得ることを、我々の親たちが信じて居ようとした、努力の痕跡とも解し得られぬことは無い。

西播惟談實記といふ本に、楫保郡新宮村いばほ しんぐうの民七兵衛、山に薪採りに行きて還らず、親兄弟歎き悲みしが、二年を経たる或夜、村の後の山に來て七兵衛が戻つたぞと大聲に呼はる。人々悦び近所一同山へ走り行くに、麓に行著く頃までは其聲がしたが、登つて見ると早何處にも居なかつた。天狗の下男にでもなつたものかと、村の内では話し合つて居たが、其後此村から出て久しく江戸に居た者が、東

海道を歸つて來る途で、興津の宿とかで七兵衛に出逢つた。是も互ひに言葉を掛けて別れたが、家に歸つて聞くと此話であつた。それから終に風のたよりも無かつたといふことである。即ちたつた一度でも村の山へ來て呼はらぬと、人はやはり驅落ちと解する習ひであつた故に、自然に此様な特徴が出て來たのである。

九桂草堂隨筆卷八には、又次のやうな話がある。廣瀬旭莊先生の實驗である。

我郷(豊後日田郡)に伏木といふ山村あり。民家の子五六歳にて、夜啼きて止まず。戸外に追出す。其傍に山あり。聲稍遠く山に登るやうに聞えければ驚きて尋ねしに終に行方知れず。後十餘年にして、我同郷の人小一と云ふ者、日向の梓越と云ふ峯を過ぐるに、麓より恠しき長七八尺ばかり、滿身に毛生じたる物上り來る。大に怖れ走らんとすれども、體痺れて動かず。其物近づきて人語を爲し、汝いづくの者なりやと問ふ。答へて日田といふ。其物、然らば我郷なり。汝伏木の兒失せたることを聞きたりやと謂ふ。其事は聞けりと答ふ。其物、我即ち其兒なり。

其時我今仕ふる所の者より收められて使役し、今は我も數山の事を領せりと謂ひて、懷より橡實とちのみにて製したる餅様の物を出し、我父母存命ならば、是を届けてたまはれと謂ふ。何れの地に行きたまふかと問ふに、此より椎葉山しひばやまに向ふなりと言ひて別れ、それより路無き斷崖に登るを見るに、その捷きこと鳥の如しといふ。話は余少年の時小一より聞けり。是れ即ち野人なるべし。

一四 殊に若き女の屢隠されし事

女の神隠しには殊に不思議が多かつた。是は岩手縣の盛岡で、曾て按摩から聽いた話であるが、今からもう三十年も前の出來事であつた。此市に住んで醬油の

行商をして居た男、留守の家には女房が一人で、或日の火ともし頃に表の戸をあけて、此女が外に出て立つて居る。あゝ悪い時刻に出て居るなど、近所の人たちは思つたさうだが、果して其晩から居なくなつた。亭主は氣ちがひの様になつて商賣も打棄てゝ置いてそちこちと捜しまはつた。若しやと思つて岩手山の中腹の綱張温泉に出かけて其邊を尋ねて居ると、とう／＼一度だけ姿を見せたさうである。やはり時刻はもう暮近くに、何氣無しに外を見たところが、宿から僅か隔つた山の根笹の中に、腰より上を出して立つて居た。すぐに飛出して近づき捕へようとしたが、見えて居ながら段々に遠くなり、笹原づたひに峯の方へ影を没してしまつたと謂ふ。

又是も同じ山の麓の雫石シヅクイシと云ふ村には斯んな話もあつた。相應な農家で娘を嫁に遣る日、飾り馬の上に花嫁を乗せて置いて、ほんの些しの時間手間取つて居たら、もう馬ばかりで娘は居なかつた。方々探しぬいて如何しても見當らぬとなつ

てから又數箇月も後の冬の晩に、近くの在所の辻の商ひ屋に、五六人の者が寄合つて夜話をして居る最中、からりとくゞり戸を開けて酒を買ひに来た女が、よく見るとあの娘であつた。村の人たちは甚だしく動顛したときは、先づ口を切る勇氣を失ふもので、ぐず／＼として居るうちに酒を量らせて勘定をすまし、さつさと出て行つてしまつた。それと言ふので寸刻も間を置かず、直ぐに跡から飛出して左右を見たが、もう何處にも姿は見えなかつた。多分は軒の上に誰かゝ居て、女が外へ出るや否や、直ちに空の方へ引張り上げたものだらうと、解釋せられて居たといふことである。

○

單なる偶然から此地方の話を、自分はまだ幾つと無く聽いて記憶して居る。それが特に他の府縣に比べて、例が多いといふことを意味せぬのは勿論である。同縣上閉伊郡の鱒澤といふ村で、是も近世の事らしいからもつと詳しく知つて居る

人があらうが、或農家の娘物に隠されて永く求むれども見えず、今は死んだ者とあきらめて居ると、ふと或日田の掛稻の陰に、此女の來て立つて居るのを見た人があつた。其時は併しもう餘程氣が荒くなつて居て、普通の少女の様では無かつた。さうして又忽ち走り去つて、終に再び還つて來なかつたと謂つて居る。遠野物語の中にも書いてある話は、同郡松崎村の寒戸さむとといふ處の民家で、若い娘が梨の樹の下に草履を脱いで置いたまゝ、行方知れずになつたことがあつた。三十何年を過ぎて或時親類知音の者が其家に集まつて居るところへ、極めて老いさらばうて其女が戻つて來た。どうして歸つて來たのかと尋ねると、あまりみんなに逢ひたかつたから一寸來た。それでは又行くと言つて、忽ち何れへか走り去つてしまつた。其日はひどい風の吹く日であつたといふことで、遠野一郷の人々は、今でも風の騒がしい秋の日になると、けふは寒戸の婆の還つて來さうな日だと謂つたとある。

是と全然似た言ひ傳へは、又三戸郡の櫛引村にもあつた。以前は大風の吹く日には、けふは傳三郎どうの娘が來るべと、人がことわざのやうにして言つて居たさうだから、たとへば史實であつてももう年數が經過し、昔話の部類に入らうとして居るのである。風吹といふことが一つの様式を備へて居る上に、家に一族の集まつて居たといふのは、祭か法事の場合であつたらうが、それへ來合せたとあるからには、既に幾分の靈の力を認めて居たのである。釜石地方の名家板澤氏などでは、之に近い舊傳があつて毎年日を定め、昔行き隠れた女性が、何人の眼にも觸れること無しに、還つて來るやうに信じて居た。鹽に水を入れて表の口に出し、新しい草履を揃へて置くと、いつの間にか其草履も板椽も、濡れて居るなどと噂せられた。此家のは娘で無くて、近く迎へた嫁女であつた。精密な記憶が家に傳はつて居り、いつの頃よりか不滅院量外保壽大姉といふ戒名を附けて祀つて居た。家門を中心とした前代の信仰生活を、細かに比較研究した上で無ければ斷

定も下されぬが、恐らくは是が神隠しに對する、一つ昔の我々の態度であつて、假に唯一人の愛娘まへむすめなどを失うた淋しさは忍び難くとも、同時に之に由つて家の貴とさ、血の清さを證明し得たのみならず、更に亦眷屬郷黨の信仰を、統一するところが出來たものでは無いかと思ふ。

○

伊豆では今の田方郡田中村大字宗光寺の百姓惣兵衛が娘はつ十七歳、今から二百十餘年前の寶永頃に、突然家出をして行方不明であつた。はつの母親が没して三十三回忌の日、還つて來て家の前に立つて居た。近所の者が見付けて聲を掛けると、答もせずして走り出し、又何れかへ往つてしまつた。其後も天城山に薪を樵り、又は宮木を曳きなどに入つた者が、折々此女を見かけることがあつた。いつも十七八の顔形で、身には木の葉などを綴り合せた珍らしい衣服を纏うて居た言葉をかけると答も無く、直ちに遁げ去るを常としたと、槃遊餘録の第三編、寛

政四年の紀行のうちに見えて居る。甲州では逸見筋淺尾村の孫左衛門を始とし、金御嶽かねのみたけに入つて仙人と爲つたといふ者少からず、東河内領の三澤村にも、藥を常磐山に採つて還らなかつた醫者がある。今も時として其姿を幽谷の間に見る者があつて、土人は一様に之を山男と名けて居るが、其の出身の村なり家なりでは、永く其前後の事情を語り傳へて、寧ろ因縁の空しからざることを感じて居たやうでもあつた。

一五 生きて居るかと思ふ場合多かりし事

少なくとも血を分けた親兄弟の情としては、是が本人たゞ一人の心の迷から出

たものと、解してしまふことが昔は出来なかつた。一人では到底深い山の奥などへ、入つて行く筈の無い童子や若い女房たちが、現に入つて行き、又多くは戻つて來ぬのだから、誰か誘うた者があつたことを、想像するに至つたのも自然である。實際又山の生活に關する記録の不完全、多くの平野人の法外な無識を反省して見ても、曾てさういふ奪略者が絶対に無かつたとは斷言することを得ない。問題はたゞ斯くの如き想像の中で、果してどこ迄は一應根據のある推測であり、又どの點からさきが單に畏怖に基いたる迷信、乃至は誤解であつたらうかと云ふことである。

しかも自分たちの見る所を以てすれば、右の問題の分界線としても、時代の移るにつれて始終一定して居たわけでも無いやうである。例へば天狗さまがさらつて行くといふことは、殊に兒童少年に付いては近世に入つてから、甚だ頻繁に風説せられるやうになつたけれども、中世以前には東大寺の良辨らうべん僧正のやうに、鷲に

取られたと云ふ話の方が遙かに多く、其中にも亦稀には命を助かつて慈悲の手に育てられ、終には親の家へ戻つて來た者さへあるやうに、今昔物語などには語り傳へて居る。それから引續いて又世上一般に、鬼が人間の子女を盗んで行くものと、思つて居た時代もあつたのである。

鎌倉期の初頭あたりを一つの堺として、その鬼がまた天狗に其地位を委譲したのは、東國武士の實力増加、都鄙盛衰の事情を考へ合せても、そこに何等かの時勢の變化を暗示するものがあるやうに思ふ。その天狗の屬性とても行く／＼著しく變遷して、固より今を以て古を推すことは出来ぬが、鬼の方にもやはり地方的に、又は時代に相應した特色ともいふべきものがあつたらしいのである。例へば在原業平の悠遊して居た頃には、鬼一口に喰ひてんげりと謂つたが、大江山の酒顛童子に至つては、都に出で、多くの美女を捕へ來り、酌をさせて酒を飲むやうな習癖もあつたものゝ如く、想像せしめた場合も無いでは無かつた。天狗ばかり

は僧形であつたゞけに、感心に女には手を掛けないうやうだと話がきまると、人は別に又山賊の頭領といふ類の兇漢を描き出して、兎に角にこの頻々たる人間失踪の不思議を、説明せずには居られないやうであつた。しかも實際は小説御伽草子繪巻物以上に、的確に真相を突留めることは、求めたからとて出来ることではなかつた。

別離を悲しむ人々の情から言へば、如何なる場合にもまだ何處かの谷陰に、活きて時節を待つて居るものと、想像して見ずには居られなかつたでもあらうが、單に其様な慾目からで無くとも、現實に久しい歳月を過ぎて後、ひよつこりと還つた來た先例もあれば、又慥かに出逢つたと謂ふ人の話を、聞出した場合も多かつたのである。單に深山に女の姿を見たと言ふだけの噂ならば、其他にもまだ色色と語り傳へられて居た。假令それが我里で居なくなつた者とは何の關係も無く全然見ず知らずの別の土地の事件であつても、とにかくに人居を遠く離れた寂寞

たる別世界にも、尙何か人間の活きて行く道があるらしいといふ推測は、どの位神隱しの子の親たちの心を、慰めて居たかわからぬので、それが又轉じては此不思議の永く行はれ、氣の狂うた者の自然に山に向ふ原因ともなつたのは、是非も無い次第であつた。

○

曾ては天狗に關する古來の文献を、集めて比較しようとした人が折々あつたが是は失望せねばならぬ勞作であつた。資料を古く弘く求めて見れば見るほど、輪廓は次第に茫漠となるのは、最初から名稱以外に澤山の一致がなかつた結果である。例へば天狗とは一體どんな物かと聞いて見るとき、今日誰しも答へるのは鼻の無暗に高いことであるが、是とても狩野古法眼が始めて夢想したといふ説もあつて、中古には緋の衣に羽團扇などを持つた鼻高様は、想像することが出来なかつたのである。その上に何々坊の輩下といふ天狗だけは、口が嘴になり鼻は穴だ

けが其左右に附いて居る。同じ一類で一方は人の如く、他方は翼があつて鳥に手足を加へたものゝ如くなることは、殆ど有得ざる話であるが、人は單に變形自在を以て之を説明して、然らば本來の面目如何といふ點を、考へずに済まして居たのである。それなら實際の行動の上に、何か古今を一貫した特色でもあるかといふと、中世の天狗はふらりと來て人に憑くこと野狐の如く、或は左道の家に祭られて人を害するは、近世の犬神オサキの如くであつたが、今は絶えて其類の非難を傳へない。或は智辯學問ある法師の増上慢が、屢々生きながら天狗道に身を落さしめたと云ふ話もある。平田先生などは特に此點ばかり、佛者の言を承認しようとして居るが、是さへ近世の天狗はもう忘れたものゝ如く、寧ろ屢人間の慢心を懲らし戒めたといふ實例さへあつて、自慢を天狗と謂ふ昔からの諺も、最早根據の無いものにならうとして居る。それといふのが時代により地方に由つて、名は同じでも物が知らぬ間に變つて居たからである。書物は斯ういふ場合には大抵

は寧ろ混亂の種であつた。學者ばかりが獨りで土地の人々の知らぬことを、考へて居た例は多かつた。成程天狗といふ名だけは最初佛者などから教はつたらうが奇恠はずつと以前から引續いてあつたわけで、學者に言はせるとそんな筈は無いといふ不思議が、どし／＼と現れる。見本で物を買ふやうな理窟には行かなかつたのである。天狗をゲヒンといふに至た原因もまだ不明だが、地方によつては之を山の神と謂ひ、又は大人(オホヒト)山人とも謂つて、山男と同一視する處もある。さうして必ずしも兜巾篠懸の山伏姿で無く、特に護法と稱して名ある山寺などに從屬するものでも、其の佛教に對する信心は寺侍寺百姓以上ではなかつた。況や自由な森林の中に居るといふ者に至つては、僧徒らしい氣分などは微塵も無く、只非凡なる恠力と強烈なる感情、極端に清淨を愛して叨りに俗衆の近づくを憎み、殊に隱形自在にして、恩讎共に常人の意表に出でた故に、畏れ崇められて居たので、此點は寧ろ日本固有の山野の神に近かつた。名稱のどこ迄も借り物で

あつて、我々の精神生活の之に左右せられた部分の存外に小さかつたことは、是からだけでも推論してよいのである。山中にサトリといふ怪物が居る話は、よく方々の田舎で聞くことである。人の腹で思ふことをすぐ覺つて、遁げようと思つて居るななど、言ひあてるので、怖しくてどうにも斯うにもならぬ。それが桶屋とか杉の皮を剥く者とかと對談して居る際に、不意に手がすべつて杉の皮なり竹の輪の端が強く相手を打つと、人間といふ者は思はぬことをするから油斷がならぬと謂つて、逃げ去つたといふのが昔話である。それを四國などでは山爺の話として傳へ、木葉の衣を着て出て來たともいへば、中部日本では天狗様が遣つて來て、桶屋の竹に高い鼻を弾かれたなど、語つて居る。その土地次第で斯う謂つても通用したのである。オニなども今では角あつて虎の皮をたぶさきとし、必ず地獄に住んで亡者をさいなむ者の如く、解するのが普通になつたらしいが、その古來の表現は誠に千變萬化で、亦若干は之に充てたる漢語の鬼の字に由つて、世上の

解説を混亂せしめて居た。しかも諸國の山中に保存せられた彼等の遺跡、乃至は多くの傳説に由つて考へると、少なくとも或時代には、近世天狗と名けた魔物の所業の大部分を、管轄して居たこともあるのである。何れにしても我々の畏怖には現實の基礎があつた。單に輸入の名稱に由つて、空に想像し始めたものではなかつたのである。

不在者の生死といふことは非常に大きな問題であつた。どうせ居ないのは同じだと、言つてすませるわけには行かなかつた。生者と死者とでは、之に對する血縁の人々の仕向けが、正反對に異ならねばならなかつたからである。生きて居る者の救済も必要ではあるが、是は徐ろに時節を待つて居ることも出来る。之に反して死者は魂が自由になつて、もう家の近くに戻つて來て居るかも知れぬ。處理せられぬ亡魂ほど危険なものは無かつた。或は淋しさの餘りに親族故舊を誘ふこ

ともあり、又は人知れぬ腹立ちの爲に、あばれまはることも屢あつた。其豫防の手段は佛教以前から、色々綿密に講究せられて居たのである。而うして其手段は通例甚だ煩はしい。且つ誤まつて生者の爲に之を行ふときは、其害も亦小さくなかつた。故に單なる愛惜の情からで無くとも、一日も早く何等かの兆候を求め、隠れても尙生存して居ることを確めて置く必要があつたのである。アンデルセンが月の物語の初章に、深夜に谷川に降つて燈を水に流し、思ふ男の安否をトせんとした印度の少女が、「生きて居る」と悦んで叫んだ光景が敍べてある。普通は生死を軽く考へる東洋人が、此際ばかり特に執著の切なる情を表はす理由は、全く死に伴うた嚴重の方式があつた爲で、旅の別れの哀れな歌にも、且はこの心元無さがまじつて居たのである。夢といふもの、疎かにせられなかつた原因もここに在る。互ひに見よう見えようといふ約束が、言はず語らずに結ばれて居たのである。それが頼みにし難くなつて後、書置といふ風習が次第に行はれた、神隠

しだけは斯ういふ一切の豫定を裏切つて、突如として茫漠の中に入つてしまふのだが、しかも前後の事情と代々の經驗とに由つて、一應はやゝ幸福の方の推測を下すことが、存外に六かしくなかつたらしいのである。

一六 深山の婚姻の事

昔話の中にも折々同じ例を傳へて居る爲に、却つて信じ得る人が少なからうかと思ふが、是は既に十七八年も以前に筆記して置いた陸中南部の出来事であつてこの小さな研究と深い因縁がある故に、今一度ぢつと考へて見ようと思ふのである。或村の農家の娘、栗を拾ひに山に入つたまゝ還つて來ず、親はもう死んだ者

とあきらめて、枕を形代に葬送もすませてしまつて、又二三年も過ぎてからの事であつた。村の獵人の某と云ふ者が、五葉山ごえうざんの中腹の大きな岩の陰に於て、此女に行逢つて互ひに喫驚したといふ話である。

あの日に出で怖ろしい人にさらはれ、今は斯んな處に来て一緒に住んで居る。遁げて還らうにも少しも隙が無い。さういふうちにも爰へ来るかも知れぬ。どんな事をするか分らぬと謂ふので、碌に話も聞かずに早々に立退いてしまつたといふことである。其男といふのは全體どんな人かと獵人が尋ねると、自分の眼には世の常の人間のやうに見えるが、人はどう思ふやらわからぬ。たゞ眼の色が恐ろしくて、せいがずんと高い。時々同じ様な人が四五人も寄り集まつて、何事か話をして又何れへか出て行く。食べ物なども外から持つて還るのを見ると、町へも買物に行くのかも知れぬ。又子どもはもう何遍か産んだけれども、似て居ないから俺の見では無いと謂つて、殺すのか棄てるのか、皆何れへか持つて行つてしまつたと。其女が語つたさうである。

山が同じく五葉山であるから、一つの話では無いかとも思ふが、或は又次のやうに話す者もあつた。女は獵人に向つて、お前と斯うして話して居る處を、若しか見られると大變だから、早く還つてくれと謂つたが、出逢つて見た以上は連れて還らねばすまぬと、強ひて手を取つて山を下り、漸く人里に近くなつたと思ふ頃に、いきなり後から怖ろしい背の高い男が飛んで来て、女を奪ひ返して山の中へ走り込んだとも謂つて居る。維新前後の出来事であつたらしく、まだ其娘の男親だけは、生存して居ると謂つて、家の名まで語つたさうである(佐々木君報)。是だけ込入つた且つ筋の通つた事件は、一人の獵人の作爲に出たと思はれぬは勿論、よもや突然の幻覺では無からうと思ふが、それを確認させるだけの證據も、残念ながらもう存在せぬのである。只少なくとも陸中五葉山の麓の村里には、今でも之を聽いて寸毫も疑ひ能はざる人々が、住んで居ることだけは事實である。さう

して彼等がほど前の話を忘れようとする頃になると、又新たに少し似たやうな話
が、どこからとも無く傳はつて來ることに、是迄は殆どきまつて居たのである。

右の珍らしい實例の中で、殊に自分たちが大切な點と考へるのは、不思議なる
深山の聲の談話の一部分が、女房にも意味がわかつて居たといふこと、其奇怪
な家庭に於ける男の嫉妬が、極端に強烈なものであつて、我子をさへ信じ得な
つた程の不安を興へて居たことである。即ち彼等は若し眞の人間であつたとし
たら、あまりにも我々と遠く、もし又神か魔物かだつたといふならば、あまりに
も人間に近かつたのであるが、しかも山の谷に住んだ日本の農民たちが、之を聽
いて有り得べからずとすることが出来なかつたとすれば、そは必ずしも漠然たる
空夢ではなかつたらう。誤つたにもせよ何等かの實驗、何等かの推理の豫め素地
を爲したものが、必ずあつた筈と思ふ。現代人の物を信ぜざる權利は、決して之に
由つて根強い全民衆の迷信を、無視し得るまでの力あるものでは無いのである。

○

曾て三河の寶飯郡の某村で、狸が一人の若者に憑いたことがあつた。狐などよ
りは口軽く、無暗に色々の事をしゃべるのが、此獸の特性とせられて居るが、此
時も問はず語りに、をれば此村の誰といふ女を、山へ連れて往つて女房にして居
ると謂つた。出たら目かとは思つたが、實際ちやうど其女が居なくなつて、頻り
に搜して居る際であつた故に、根ほり葉ほりして隠して置くといふ場處を問ひた
だし、若しやといふので山の中を搜して見ると、果して岩穴の奥とかにその娘が
居たといふことである。還つて來てから本人が、どういふ風に顛末を語つたか。
此話をしてくれた人も聞いては居らず、又強ひて詳しくその點を究める迄も無い
か知らぬが、風説にもせよ世を避けて山に入つて行く若い女を、一種の婚姻の如
く解する習はしは弘く行はれて居たので、それが不條理であればあるだけに、底
に隠れた最初の原因が、殊に學問として尋ねて見る價值を生ずるのである。猿の

聳入の昔話は、前に既に大要を叙べて置いたが、是にも欺き終うせて無事に還つて來たと云ふ童話式のものゝ外に、とう／＼娘を取られたといふ因縁話も傳はつて居る。龍蛇の婚姻に至つては末遂げて再び還らなかつたといふ例が殊に多い。黒髪長くまみ清らかなる者は何人も之を愛好する。齡盛りにして忽然と身を隠したとすれば、人に非ずんば何か他の物が、之を求めたと推斷するが自然である。特に山男の場合に限つて、目するに現實の遭遇を以てする理由は無いのかも知れぬ。ましてや世界の諸民族に共通なる、所謂ビースト・エンド・ビウティの物語の、是が根原の動機を爲すかの如く、説かんとすることは速斷に失するであらう。又今日までの資料では、強ひて其見解を立てるだけの勇氣は、自分たちにもまだ無いのだが、只注意してもよいことは日本といふ國には、近世に入つてからも此類の話が特に數多く、又屢新なる實例を以て、古傳を保障しようとして居たことである。普通の場合には俗に「みいられた」とも稱し、女が何かの機會に選

定を受けたことになつて居り、伊豆の三宅島などには山に住む馬の神がみいつたといふ話もあつて、過度に素朴なる口碑は諸國に多く、さうで無ければ不思議な因縁が其女の生れた時から附纏ひ、又は新たなる親の約束などがあつて、自然に其運命に向はねばならなかつたやうに、語り傳へて居るに反して、別に我々が聽き得たる近年の例は、全く偶然の不幸から掠奪せられて山に入つて居る。さうして如何にも人間らしい強い執着を以て、愛せられ且つ守られて居たといふのである。それを單なる昔話の列に押並べて、空想豊かなる好事家が、勝手な尾鱗を附添へたかの如く解することは、少くとも私が集めて見た幾つかの旁證が、斷じて之を許さないものである。

一七 鬼の子の里にも産れし事

母は往々にして不當に疑はれた。似て居らぬから我子で無いといふ單純に失した推斷は、必ずしも獨り五葉山中の山人のみの專賣でもなかつたのである。至つて平和なる里中にも、親に似ぬ子は鬼子といふ俚諺は、今以て行はれて居て、時は又之を裏書するやうな事件が、發生したとさへ傳へられるのである。

「日本はおろかなる風俗ありて、齒の生えたる子を生みて、鬼の子と謂ひて殺しぬ」と、徒然慰草の卷三には記してある。江戸時代初頃の人の著述である。尙それよりも遙かに古く、東山往來といふ書物の消息文の中にも、家の女中が齒の生えた兒を生んだ。是れ鬼なり山野に埋むるに如かずと近隣の者が勸めるが、如何したものだらうかといふ相談に答へて、坊主にするのが一番よろしからうと謂つてゐる。即ち以前は相應に頻々と、處々に此様な異様の出來事があつたかと思は

れるのである。

けだし人は到底凡庸を愛せずには居られなかつた者であらうか。前代の英雄や偉人の生ひ立ちに關しては、如何なる奇瑞でも承認して居りながら、事一たび各自の家の生活に交渉するときは、寸毫も異常を容赦することが出來なかつた。近世に入つてからも、稀には齒が生えて産れる程の異相の子を儲けると、大抵は動顛して卽座に之を殺し、之に由つて酒顛童子茨木童子の如き惡業の根を絶つた代りには、一方には又道場法師や武藏坊辨慶の如き、絶倫の勇武強力を發揮する機會をも與へなかつた。是れ恐らくは天下太平の世の一弱點であつたらう。

しかも胎内變化の生理學には、今日尙説き明かし得ない神祕の法則でもあるのか。此様な奇恠な現象にも、やはり時代と地方とに由つて、一種の流行の如きものがあつた。詳しく言ふならば、鬼を怖れた社會には鬼が多く出てあばれ、天狗を警戒して居ると天狗が子供を奪ふのと同様に、牙あり又角ある赤ん坊の最も數

多く生れたのは、所謂魔物の威力を十二分に承認して、農村家庭の平和と幸福迄が、時あつて彼等に由つて左右せられるかの如く、氣遣つて居た人々の部落の中であつた。

一一〇

○
鬼子の最も怖ろしい例としては、明應七年の昔、京の東山の獅子が谷と云ふ村の話が、奇異雑談集の中に詳しく報ぜられて居る。玄同放言三卷下には全文を引用して居るが、記事にはあやふやな部分がちつとも無く、少なくとも至つて精確なる噂の聞書である。其大要のみを挙げると、此家の女房三度まで異物を分娩し四番目に産んだのがこの鬼子であつた。生れ落ちたとき大さ三歳子の如く、やがてそこらを走りあるく故に、父追掛けて取すくめ、膝の下に押付けて見れば、色赤きこと朱の如く、兩眼の他に額に尙一つの目あり、口廣く耳に及び、上に齒二つ下に齒二つ生えて居た。父嫡子を喚びて横槌を持つて來いといふと、鬼子之を聞

いて父が手に咬みつくのを、其槌を以て頻りに打つて殺してしまつた。人集まりて之を見ること限り無しとある。その死骸は西の大路眞如堂の南、山際の崖の下に深く埋めた。ところが其翌日田舎の者が三人、梯子をかたげて此下を通り、崖の土の少しうごもてるを見て、土龍鼠むぐらもちが居ると謂つて柵あふこのさきで突いて見ると、ひよつくりと其鬼子が出た。三人大に驚いて此は聞及んだ獅子が谷の鬼子だ。只早く殺すがよいと、杓を揮うて頻に打ち、終に之を叩き殺した。それを慘酷な話だが、繩を附けて京の町まで曳いて來ると、途中多くの石に當つたけれども、皮膚強くして少しも破れずとまで書いてある。此事常樂寺の栖安軒琳公幼少喝食の時、崖の下にて打殺すをまのあたり見たりと謂へりとあつて、事件の當時から約九十年後の記述である。

○
何故に親が大急ぎで、牙の生えた赤子を殺戮せねばならなかつたかは、實は必

ずしも明瞭では無い。家の外聞とか耻とか謂ふのも條理に合はなかつた。殺して之を清める望は無かつたのみならず、匿し終うせた場合さへ少なかつた。然らば活かして置いて何が悪いかと尋ねて見ると、是亦格別の事は無かつたのである。兇暴無類の評ある大江山の酒顛童子、其子分か義兄弟の如く考へられた茨木童子なども、單に今まで見ず知らずの他人に對して、殘忍であつたといふのみで、翻つて其家庭生活を検すれば、思ひの外なるものがあつた。越後名寄卷三十三其他の所傳に依れば、酒顛童子は此國西蒲原郡砂子塚いさこづか、又は西川櫻林村の出身と稱して各その舊宅の址があつた。附近の和納わのつといふ村にも後に引越して來たと謂つて今尙榎の老木ある童子屋敷、下名さげなを童子田と呼ぶ水田もあつた。童子幼名を外道丸と名けられ美童であつた。父の名は否瀬善次兵衛俊兼、戸隱山九頭龍權現の申し兒であつて、母の胎内に十六箇月居たといふだけが、親に迷惑を掛けたといへば掛けたのである。和納の楞嚴寺で文字を習ひ、國上くにがみの寺に上つて侍童となる迄

は不良少年でも何でも無かつた。茨木童子の故郷も攝津に在る方が正しいのかも知れぬが、是亦越後にも一箇處あつて、今の古志郡荷頃村大字輕井澤、茨木善次右衛門は其生家と稱し、連綿として若干の記憶を傳へて居た。例へば家の背後に童子が栖んだといふ岩屋、それは崩れて其跡に清き泉湧き、流の末には十坪ばかりの空地あつて、童子出生の地と稱して永く耕作をさせなかつた。惡人に對する記念では無かつたのである。

攝州川邊郡東富松の部落に於ては、既に茨木童子の家筋は絶えた代りに、更に一段と心を動かすべき物語が残つて居た。攝陽群談卷十に曰ふ。童子生れながらにして牙生ひ髪長く、眼に光あつて強盛なること成人に超えし故に、一族畏怖して之を茨木の邊に棄てた處、丹波千丈嶽の強盜酒顛童子拾ひ還りて養育して賊徒と爲す云々。しかも兩親が後に病に罹つて同じ枕に寢て居るのを、術を以て遙かに之を知り、心配をして見舞に還つて來たと謂ふのは、やはり松崎の寒戸の婆な

どの例であらう。只今は京都に留まつて、東寺の邊に安住して居る。人に怖ろしい姿を見せぬやうに、急いで還らうと飛んで往つたといふ田圃路に、安東寺の字名などが残つて居り、其時親が悦んで團子を食はせた記念として、毎年同じ日に村では團子祭をすると謂つて居る。

戦が無くなり國中が統一してしまふ迄は、斯ういふ義理固い無茶者は、求めても養つて置く必要が時としてはあつた。言はゞ百姓の家に生れたのが損だつたのである。肥後の川上彦齋の傳を見てもさう思ふが、江戸幕府の初頭に刑せられたあぶれ者、大鳥一兵衛などに就ては殊に其感が深い。ほんのもう四十年か五十年早く生れて居たら、彼は大名になつたかも知れぬのである。一兵衛自身の身の上話といふのは、慶長見聞集卷六に出て居る。武州大鳥といふ在所に利生あらたかなる十王まします。母にて候ふ者子無きことを悲み、此十王堂に一七日籠り、滿ずる曉に靈夢の告あり、懐胎して十八月にしてそれがし誕生せしに、骨柄たくま

しく面の色赤く、向ふ齒あつて髪はかぶろなり。立つて三足歩みたり。皆人は是を見て悪鬼の生れけるかと驚き、既に害せんとせし處に、母之を見て謂ひけるやうはなう暫く待ちたまへ思ふ仔細あり、是は十王への申し兒なれば、其しるし有りて面の色赤し云々と申されければ、我を助け置き幼名を十王丸と謂へりとある。祈る佛も多くあつた中に、特に閻魔に兒を申したといふのは、別に近代の母親の相續せざる、一種戦國時代相應の理想があつた爲かと思ふ。さうでは無い迄も大王が事を好み、餘計な迷惑を信徒に與へんとしたので無いことだけは、一般に之を認めて居たやうに見えるが、しかもそれは京都と其附近で、盛に牙ある赤子を撲殺した時代よりも、亦ずつと後年の田舎の事であつた。

内田邦彦君の南總之俚俗の中に、東上總の本納邊ほんのちの慣習として、鬼子が生れると歳神様へ上げた棒で叩くとある。之とよく似た事で今日弘く行はれて居るのは赤ん坊が餘り早く、例へば一年以内にあるき始めると、大きな餅を搗いて之を脊

負はせ、それでも猶あるくと突倒したりする親がある。鬼子と謂ふの多分齒が生えて産れる子のことであらうが、單に殺すとを許されぬ故に、斯んな方法を後に代用したものと見ても、尙歳神の棒といふことには、考へ出さねばならぬ深い意味がある。或は本來は此上も無い立派な兒であるけれども、凡人の家に取つては善過ぎる爲に、其統御を神に委ぬるの意味では無かつたか。何れにもせよ後世の民家で、怖れて殺した程の異常なる特徴は、同時に又上古の英傑勇士名僧等の奇瑞として、尊敬して永く語り傳へたものと一致し、更に常理を以て判断しても、其が悉く昔の個人生活の長處ばかりであつたことを考へると、野蠻な風習だから大昔からあつたらうと、手輕に推斷することも出来ぬやうである。人間の畸形にも不具と出来過ぎとが確かにある。大男も片輪のうちに算へるのは、所謂鎖國時代の平民の哀れな遠慮であらう。蝦夷のシャグシャインやツキノイ、南の小島では赤蜂本瓦あかぶさほんがはらや與那國の鬼虎の如き、容貌魁偉なる者は多くは終を全うしなかつ

た。それを案じて家に此様な者の生れるを忌んだのは、恐くは新國家主義の犠牲であつた。部曲が對立して争闘して止まなかつた時代には、所謂鬼の子は即ち神の子で、それ故にこそ今も諸國の古塚を發くと、往々にして無名の八掬脛やつかばねや長髓ながずね彦ひこの骨が現れ、若くは現れたと語り傳へて尊信して居るのである。

沖繩の遺老説傳には次のやうな話がある。昔宮古島みやこ川満かほまの邑に、天仁屋大司あめにやおほつかさといふ天の神女、邑の東隅なる宮森に來り寓し、遂に目利眞めりま按司あんじに嫁して三女一男を生む。夫死して妻のみ孤兒を養ふに、第三女眞嘉那志まかなし十三歳、忽ち懐胎して十月に生じて一男を坐下す。頭には双角を生じ眼は環たまきを懸くるが如く、手足は鷹の足に似たり。容貌人の形に非ず。故に之を名けて目利眞角嘉和良めりまのかわらと謂ふ。年十四歳の時、祖母天仁屋及び母眞嘉那志に相隨ひて、俱に白雲に乗りて天に升る。後年屢目利眞山に出現して、靈驗を示す。邑人尊信して神嶽と爲すと。ツカサは巫女を意味し又多くは神の名であつた。カワラは沖繩の按司と同じく、亦頭目のこ

とである。先島の神人には角を名に著くものが他にもある。即ち神の子であり、後又神に隠されたる公けの記録が、彼島だけには是ほど儼然として傳はつて居るのである。殺すといふことは少なくとも、古代一般の風習では無かつた。

一八 學問は未だ此不思議を解釋し得ざる事

嘘かとは思ふが何郡何村の何某方と、固有名詞が完全に傳はつて居る。今から三十年ほど以前に、愛媛縣北部の或山村で、若い嫁が難産をしたことがあつた。其時腹の中から聲を發する者があつて、をれば鬼の子だが殺さぬなら出て遣る。若し殺すならば出て遣らぬがどうかと言ふ。活かして置くのは家の名折れとは思

つたが、いつ迄も産れないでは困る故に、皆で騙して決して殺さぬといふ約束をした。さうして待構へて居て莫産で押へて殺してしまつた。角の長さが二寸ばかり、祕密にして居たのを遠縁の親類の女が知つて、終に此話の話し手にしやべつたのが私にも聽えた。但しどうして又其様な怖ろしい物を孕んだかは、今に至るまで不明であるが、此近傍には鬼子の例少なからず、或村の一家の如きは鬼の子の生れる少し以前に、山中に入つて山姥のヨックネと云ふ物を拾ひ、それから物持になつた代りに、亦斯ういふ出来事があつたと謂ふ。ヨックネとは方言で麻絲の球のこと、山姥の作つたのは人間の引いたのとは違つて、使つても使つても無くならぬ。即ち所謂盡きぬ寶であつた。

又大隅海上の屋久島やくのしまは、九州第一の高峯を擁して、山の力の今尙最も強烈な土地であるが、島の婦人は往々にして鬼の子を生むことありと、三國名勝圖會には記して居る。山中に入りたる時頻りに睡眠を催し、異人を夢みることあれば必ず

娘む。産は常の如くにして、たゞ終りて後神氣快からずと雖死ぬやうなことは決して無い。生れた兒は必ず齒を生じ且つ善く走る。仍て鬼子とは謂ふ也とある。此の如き場合には、柳の枝を其兒の口にくはへさせて、之を樹の枝に引懸けて置くと、一夜を過ぐれば必ず失せて無くなると謂つて居た。普通の赤ん坊ならば無論活きて居る筈は無いのだが、島の人々は或は父方に引取つて、養育して居るものゝ如く考へて居たものらしい。前後の状況は甚だしく相違するが、兎に角に是も一種の神隠しではあつた。

○

肥後南部の米良山めらやまの中にも、入つて働いて居る女の不時に睡くなると謂ふ處があつた。さういふ際にはよく妊娠することがあつて、之を蛇の所業の如く信ずる者もあつたと謂ふ。現に近年も某氏の夫人、春の頃に蕨を採りに往つて其事があつたので、若しや蛇の子では無いかと思つて、産をしてしまふ迄一通りならぬ心

痛をしたさうである。古い書物に巨人の跡を踏み、或は玄鳥の卵を呑んで感して身ごもることありと記したのも、多分は斯ういふ事情を意味したものであらう。氣高い若人が夜深く訪ねて來たと云ふ類の話にも、最初に溪川の流に物を洗ひに降りて、美しい丹塗りの箭が川上から泛んで來たのを、拾うて還つて床の側に立て、置いたと謂ふ例があるのを見ると、亦異常なる感動を以て、母と爲る豫告の如く解して居た、昔の人の心持が察せられる。たゞ村民の信仰が追々に荒んで來て、斯ういふ奇瑞の示された場合にも、怖畏の情ばかり獨り盛んで、兎角に生れる子を粗末にした。大和の三輪の神話と豊後の尾形氏の古傳とは、或は其系統を一にするかとの説あるにも拘らず、後者に於ては神は誠に遠慮勝ちで、岩窟の底に潜んで永く再び出でなかつた。其他の地方の多くの類例に至つては、鍔の針に傷けられて命終ると謂ひ、普通には穴の口に近よつて人が立聽きするとも知らず蓬よもぎと菖蒲の葉の祕密を漏した話などになつて居り、姫嶽の大太童だいたわらはの如く子孫が大

に榮えたといふ場合は、今では之を見出すことがやゝ難くなつて居るのである。作陽志には美作吉田郡越畑の大平山に牛鬼と名くる怪あり。寛永中に村民の娘年二十ばかりなる者、恍惚として一夜男子に逢ふ。自ら鍔山の役人と稱して居た。後に孕んで産む所の子、兩牙長く生ひ尾角共に備はり、儼として牛鬼の如くであつたので、父母怒つて之を殺し、鍔の串に刺して路傍に暴した。是れ村野の人後患を厭するの法なり云々とあつて、昔はさしも大切に事へた地方の神が、次第に輕ぜられ後終に絶縁して、いつと無く妖怪變化の類に混じた經路を語つて居る。さうして何れの場合にも、鍔といふ金屬か常に強大な破壊力であつた。屋久島などでも殊に鍛冶の家が尊敬せられ、不思議な懷胎には必ず鍔かまくらを貫つて來て、柳の葉と共に合せ煎じて飲むことになつて居たさうである。

○ 山に入つて山姥のヲツクネなるものを拾つた故に、物持にもなつた代り鬼子も

生れたと云ふ話には、更に一段と豊富なる暗示を含んで居るらしい。山姥は成程多くの神童の母であり、同時に又珍しい福分の主でもあつたことは、次々にも猶述べるやうに、諸國の昔からの話の種であつたが、特に常人の女性に角ある兒を産ましめる爲に、彼女が干涉すべき必要は無かつた筈である。察する所本來この不可思議の財寶は、寧ろ不可思議な童子に伴うて神授せらるべきものであつたのを、人が忘却して之を顧みぬやうになつてから、山中の母ばかりが管理することとなつたのであらう。此想像を幾分か有力にするのは、ウブメ(産女)と稱する道の傍の怪物の話である。支那で姑獲と呼ぶ一種の鳥類を之に當て、産で死んだ婦人の怨魂が化成する所だの、小兒に害を與へるのを本業にして居るのと、古い人たちは斷定してしまつたやうだが、それでは説明の出來ない著しい特徴には、少なくとも氣に入つた人間だけには、大きな幸福を授けようとして居た點である。即ちウブメ鳥と名くる一種の怪禽の話をして別にして考へると、ウブメは必ず深夜に

道の畔に出現し、赤子を抱いて呉れと謂つて通行人を呼留める。喫驚して逃げて來るやうでは話にならぬが、幸ひに勇士等が承諾して之を抱き取ると、段々と重くなつてしまひには腕が抜けさうになる。その昔話は此から先が二つの様式に分れ、よく見ると石地藏であつた石であつたと謂ふのと、抱き手が名僧でありウブメは幽靈であつて、念佛又は題目の力で苦艱を濟つてやつたといふのとあるが、何れにしても満足に依託を果した場合には、非常に禮を言つて十分な報謝をしたことになつて居る。佛道の縁起に利用せられない方では、ウブメの禮物は黄金の袋であり、又は取れども盡きぬ寶であつた。時として其代りに、五十人百人力の力量を授けられたと云ふ例も多かつたことが、佐々木君の東奥異聞などには見えて居る。今昔物語以來の多くの實例では、ウブメに限らず道の神は女性で、喜怒哀怨が一般に氣紛れであつた。或者は之に逢うて命を危くし、或者は其因縁から幸運を捉へたことになつて居る。後世の宗教觀から見るときは甚だ不安である爲

に、段々と畏怖の情を加へたのだが、神に選擇があり人の運に前定があつたと信じた時代には、是も亦禱るに足りた貴き靈であつたに相違ない。つまりは兒を授けられるといふのは優れた兒を得るを意味し、申し子といふのは子の無い親ばかりの願では無かつたのである。さうして山姥の如き境遇に入つても、尙金太郎の如き子を欲しがつた社會が、曾て古い時代には確かにあつたことを、今は既に人が忘れて居るのである。

一九 山の神を女性とする例多き事

人の女房を山の神と謂ふ理由としては、いろはの中ではヤマの^{かみ}上^{かみ}がオクだから

申し兒

など、馬鹿げた説明は既に多い。或は里神樂の山の神の舞に、杓子を手に持つて出て舞ふからと謂ふなどは、尤もらしいが稍循環論法の嫌ひがある。何の故に山の神たる者が此の如く、人間の家刀自の必ず持つべきものを、手草たぐさに執つて舞ふことにはなつたのか。それが先づ決すべき問題だと言はねばならぬ。杓子はなるほど山中の産物であつて、最も敬虔に山神に奉仕する者が、之を製して平野に持ち下る習ひではあつたが、只それのみでは神自ら之を重んじ、又多くの社に於て、之を信徒に頒與する迄の理由にはならぬ。岐阜縣の或地方では、以前は山の神の産衣うぶぎぬと稱して、長の六七尺もある一つ身の著物を献上する風があつたといふが、今は如何であらうか。之に對しては子育ての守まもりとして、巨大なる山杓子を授けた社もあつたといふ。越前湯尾峠ゆのせの孫杓子を始とし、今でも杓子には小兒安全の祈禱を含むものが多い。山と女性又は山と産育といふが如き、一見して縁の遠さうな信仰が、曾て其間に介在しなかつたならば、到底我々の家内の者に、其様

ないかめしい緯名を付與するの機會は生じなかつた筈である。

山の神は通例諸國の山林に於て、清き木清き石に就て臨時に之を祀り、禰宜神主の沙汰は無い場合が多いが、之を無格社以上の社殿の中に齋くとすれば、乃ち神の名を大山祇命おほやまづみのみこと、若くは木花開耶姫尊このはなさくやひめのみことと謂ひ、稀には其御姉の岩長姫命とも稱へて、何とかして神代卷に合致させようとするのが、近世神道の習はしである。しかも是は單に山神が或地では男神であり、又他の地方では女神であつたことを語る以外に、聊かも信仰の元の形を、跡づけた名稱では無いのである。公認せられない山神の久しい物語には、今は大凡忘れたからよいやうなもの、中々に尊き大山祇の御名を累すべきものが多かつた。木樵草荊狩人の群が、解し且つ信じ居た空想は粗野であつた。それを片端から説き立てることは心苦しいが、僅かに山の神に産衣を奉納したといふ點だけを考へて見ても、自分たちは之を岩長姫の御姉妹に托することの、由無き物好みであつたことを感ずるのである。十八九

年前に自分は日向の市房山に近い椎葉の大河内と云ふ部落に一泊して、宿主の家に傳へた秘傳の狩之卷なるものを見せて貰つたことかある。其一節の山神祭文獵直しの法といふのは、大よそ次の如き素朴なる神話であつた。不明の文字があるから、寧ろ全文を書留めて置く方がよいと思ふ。

一、そもく山の御神、數を申せば千二百神、本地薬師如来にておはします。觀世音菩薩の御弟子阿修羅王、緊那羅王、摩睺羅王と申す佛は、日本の將軍に七代なりたまふ。天の浮橋の上にて、山の神千二百生れたまふ也。此山の御神の母御名を一神いちがみの君と申す。此神産をして、三日までうぶ腹を温めず。此浮橋の上に立ちたまふ時、大摩の獵師毎日山に入り狩をして通る時に、山の神の母一神の君に行逢ひたまふとき、われ産をして今日三日になるまでうぶ腹を温めず、汝が持ちしわり子を少し得さすべしと仰せける。大摩申しけるは、事やうく勿體なき御事也。此割子と申すは、七日のあひだ行を成し、十歳未滿の女子にせさせ、てんか

ら犬にもくれじとて天じやうに上げ、ひみちこみちの袖の振合にも、不淨の火をさらひ申す。全く以て參らすまじとて過ぎにけり。其あとにて小摩の獵師に又行逢ひ、汝高をいふもの也。我こそ山神の母なり、産をして今日三日になるまで、産腹を温めず。山の割子を得さすべしとて乞ひたまふ。時に小摩申しけるは、さてさて人間の凡夫にては、産をして早くうぶ腹をあたくめ申すこと也。ましてや三日まで物をさこしめさず、おはす事のいとをしや。今日山に入らず、明日山に入らずとも、幸ひ持ちし割子を、一神の君に參らせん。かしきのうごく、白き桑の物をさこしめせとてさしあげ奉る。其時一神の君大に悦び、いかに小摩、汝がりう早く聞(開?)かせん。是より丑寅の方にあたつて、とふ阪山といへるあり。七つの谷の落合に、りう三つを得さすべし。猶行末々たがふまじと誓ひて過ぎたまふ。急々如律令。敬白。

右の話が天つ神の新嘗の物忌の日に、富士と筑波と二處の神を訪れて、一方は

宿を拒み他方は之を許したといふ物語、巨旦將來蘇民將來の二人の兄弟が、欸待の厚薄に由つて武塔天神に賞罰せられた話、世降つては弘法大師が來つて水を求めた時、悪い姥は之を否んで罰せられ、善き姥は遠く汲んで其勞を報いられたといふ口碑など、同じ系統の古い形であることは、誰人も之を認め得る。假に山の神の母に托した物語が、日向ばかりの發明であつたとしても、其意味は深いと思つた。然るにつひ近頃になつて、佐々木君の東奥異聞には、遠く離れた陸中の上閉伊郡と、羽後の北秋田郡のマタギの村とに、同じ話が口傳となつて残つて居たことを報告して居る。羽後の方では八人組十人組と謂ふ二組のマタギ、一方は忌を怖れてすげなく斷つたに反して、他の一方では小屋の頭が、たゞの女性で無いと見て快く泊め、小屋で産をさせて介抱をした。陸中の山村では獵人の名を萬治磐司と謂ひ、磐司が獨り血の穢れを厭はず親切に世話をすると、十二人の子を生んだと傳へて居る。何れも山神が其好意をめで、後々山の幸を保障したことは同じであつた。

獵師は船方などは違ひ、各自獨立した故郷があつて、互ひに交通し混同する機會は決して多くない。それが奥羽と九州の南端と、いつの頃からかは知らぬが是だけ類似した物語を傳へて居るのは、必ず隠れた原因がなければならぬ。其原因を尋ね求めることは、今からではもう六かしいであらうか否か。自分の知る限りに於ては、同じ古傳の破片かと思ふものが、中部日本では上古以來の北國街道、近江から越前へ越える荒乳山あらちにもあつた。義經記卷七に義經の一行が、此峠を越えなづんで路の傍に休んだ時、アラチといふ山の名の由來を、辨慶が説明したことになつて居る。今の人が聽けば興の覺めるやうな話だが、加賀の白山の山の神女體ころのりうぐらの宮、志賀の辛崎明神と御かたらひあつて、懷妊既に其月に近く、同じくは我國に還つて産をなされんとして、明神に扶けられて此嶺を越えたまふ折に、俄かに御催しあつて山中に於て神子誕生なされた。荒血をこぼした

まふに由つて荒血山とは謂ふとある。義經記全篇の筋とは直接の交渉無き挿話だから、作者の新案とは考へられぬ。多分は此書が成長をした足利時代中期に、まだ若干の物知りの間に、記憶せられて居た口碑かと思ふ。しかも獵人の神を援助した話は、爰では之と結び附いて居た痕跡が無い。二國に分れ住む陰陽の神が、境の山の嶺に行逢ひたまふといふことは、大和と伊勢との間でも、信濃と越後の境でも、今尙土地の民は之を語り傳へて居る。それと各地の道祖^{まへ}札の、驚くべく粗野なる由來記とは、勿論何れが本、何れが末とはきめにくい、脈絡は確かにあつたので、従つて深山の誕生といふが如き荒唐なる言傳へも、成立し得る餘地は十分にあつた。たゞ記録以前に在つては話し手の空想が僅かづゝ働いて、始終輪廓が固定しなかつたといふのみである。

例へば淨瑠璃の十二段草子は、殆ど義經記と同じ頃に、今の形が整うたものかと思ふのに、同じ話がもう別様に語り傳へられ、志賀の辛崎明神を志賀寺の上人

即ち八十三歳で貴女に戀慕したといふ珍しい老僧の後日譚にしてしまつた。其時京極の御息所^{みよすどころ}は年十七、上人三たび其御手を執つて我胸に押當てたので、乃ち懐胎なされたと謂ふのは、同じ近江國手孕村の古傳の混淆であるが、やはり亦荒乳の山中にして産の紐を解きたまふと謂ひ、取上げたる若子は面は六つ御手は十二ある異相の産兒にして、直ちに都率天に昇り住したまひ、後に越前敦賀に降つてけいたい菩薩と顯れ、北陸道を守護したまふなど、大變な出鱈目を謂つて居る勿論此通りの話が一度でも、土地に行はれて居たわけでは無く、單に愛發^{あらし}の關が上古以來、北國往還の衝に在つた爲に、他の遍土に比べては此口碑が一層弘く、且つ一層不精確に流布したことを、推定せしめるに過ぎぬのである。山姥^{さかたの}が阪田公時^{きんとき}の母であり、之を山中に養育したといふ話が、特に相州足柄の山に屬するところになつたのも、亦全然同じ事情からであらうと思ふ。江戸時代中期の讀み本として、前太平記といふ書物が世に現れる迄は、山姥の本場は必ずしも、明るい東

海のほとりの山で無かつた。信州木曾の金時山などでは、現に金時母子の棲んだといふ巖窟、金時が産湯をつかつたといふ池の跡の他に、麓の村々の石の上には此恠力童子の足跡なるものが幾らもあつて（小谷口碑集）、寧ろ山姥が自由自在に、山又山を山巡りするといふ、古い評判とも一致するのであるが、之を頼光四天王の一人に托するに至つて、足柄ばかりが有名になつたのみならず、前後唯一度の奇瑞の如く解せられて、却つて俗説の遠い由來を、尋ねる途が絶えようとするのである。

臥雲日件録などを讀んで見ると、山姥が子を生むといふ話は少なくとも室町時代の、京都にも既に行はれて居た。しかもをかしい事には一腹に三人も四人も、怖ろしい子を生むと謂ふのである。従つてそれが山神の産養ひといふ類の獵人等が言ひ傳へと、元は果して一つであるか否かも、容易に決斷することは出来ぬのだが、山姥の信仰が今ほど雜駁になつた上は致し方の無いことである。近世の山

姥は一方には極端に怖ろしく、鬼女とも名くべき暴威を振ひながら、他の一方では折々里に現れて祭を受け又幸福を授け、數々の平和な思ひ出を其土地に留めて居る。多くの山村では雪少なく冬の異常に暖かな場合に、ことしは山姥が産をするさうだと謂つて居た。阿波の半田の中島山の山姥石は、山姥が子供を連れて時は此岩の上に来て、焚火をしてあたらせるのを見たと稱して此名がある。遠州奥山郷の久良幾山には、子生こまいたわと名くる岩石の地が、明光寺の後の峯に在つて、天徳年間に山姥此に住し、三兒を長養したと傳説せられる。龍頭峯の山の主龍筑房、神之澤の山の主白髮童子、山住奥の院の常光房は、即ち共に其山姥の子であつて、今も各地の神に祀られるのみか、屢々深山の雪の上に足痕を留め、永く住民の畏敬を繋いで居た。遠江國風土記傳には平賀矢部三家の先祖、勅を奉じて討伐に來たと誌してはあるが、後に和談成つて彼等の後裔も亦同じ神に仕へたことは、秋葉山住あきはまの近世の歴史から、之を窺ふことが出来るのである。

山住は地形が明白に我々に語る如く、本來秋葉の奥の院であつた。然るに何時の頃よりか二處の信仰は分立して、三尺坊大権現の管轄は、終に廣大なる奥山には及ばなかつたのである。海道一帶の平地の民が、山住様に歸伏する心持は、何と本社の神職たちが説明しようとも、全く山の御犬おいぬを迎へて来て、魔障盜賊を退ける目的の外に出なかつた。今こそ狼は山の神の使令として、神威を宣布する機關に過ぎぬだらうが、若し人類の宗教にも世に伴ふ進化がありとすれば、曾ては狼を直ちに神と信じて、畏敬祈願した時代があつて、其痕跡は數々の民間行事、乃至は覺束ない口碑の中などに、辿れば之を尋ね出すことが出来るわけである。山に繁殖する獸は數多いのに、獨り狼の一族だけに對しては、産見舞といふ慣習が近頃まであつた。遠江三河には限つたことでは無いが、諸國の山村には御犬岩など、名けて、御犬が子を育てる一定の場處があつた。いよ／＼産があつたといふ風説が傳はると、里では色々の食物を重箱に詰めて、わざ／＼持參したと云ふ

話は珍しくない。但し果して狼の産婦が實際貫つて食べたか否かは確かでない。津久井の内郷などでは赤飯の重箱を穴の口に置いて來ると、兎や雉子の類を返禮に入れて返したなど、もうそろ／＼昔話に化し去らんとして居るが、秩父の三峯山では今以て嚴重の作法があつて、之を御産立おこたての神事と謂ふさうである。三峯山誌の記する所に由れば、御眷屬子を産まんとする時は、必ず凄然たる聲を放つて鳴く。心直くなる者のみ之を聽くことを得べし。之を聽く者社務所に報じ來れば、神職は潔齋衣冠して、御炊おたき上げと稱して小豆飯三升を炊き酒一升を添へ、其者を案内として山に入り求むるに、必ず十坪ばかりの地の一本の枯草も無く、掃き清めたかと思ふ場所がある。其他に注連を繞らし飯酒を供へて、祈禱して還ると謂ふので、是亦産の様子を見たのでは無いが、此神事のあつた年に限つて、必ず新たに一萬人の信徒が増加するとさへ信じて居た。

しかも此話が單に山神信仰の様式に過ぎなかつたことは、所謂御産立の神事

が年を隔て、稀に行はれて居たのを見ても察せられる。狼は色欲の至つて薄い獣だといふ説もあり、或は此獣の交るを見た者は、災があると謂ふ説があつたのも、つまりは山中天然の現象の観察が、此の如き信仰を誘うたものでは無く、豫て山神の子を産むといふ信仰があつた爲に、斯る偶然の出来事に對しても、尙神祕の感を抱かざるを得なかつたことを意味するかと思ふ。狼が化けて老女と爲り若くは老女が狼の姿を假りて、旅人を劫かしたと云ふ話は、西洋にも弘く分布して居るらしいが、日本での特色の一つは、是も亦分娩といふこととの關係であつた。殊に阿波土佐伊豫あたりの山村に於ては、身持の女房が俄かに産を催し、夫が水を汲みに谷に降つて居る間に、狼の群に襲はれたと云ふ話を傳へ、又は山小屋に産婦を残して里に出た間に、咬み殺されたといふ類の物語があつて、或は此獣が荒血の香を好むといふが如き、恠しい博物學の資料にも爲つて居るやうだが、實事としては餘りに似通うた例のみ多く、しかも其故跡には大木や巖があつて、

屢祟りを説き亡靈を傳へて居るのを見ると、是も本來同一系統の信仰が、次第に形態を變じて奇談小説に近づかうとして居るものなることを、推測することが出来るのである。

但し實際此問題は六かしくて、もう是以上に深入するだけの力も無いが、兎に角に自分が考へて見ようとしたのは、何故に多くの山の神が女性であつたかといふことであつた。山中誕生の奇恠なる昔語りが、斯く色々の形を以て弘く且つ久しく行はれて居るのは、或は此疑問の解決の爲に、大切なる鍵では無かつたかといふことである。日向の椎葉山の獵人傳書に、山神の御母の名を一神の君と記し又は安藝と石見を境する龜尾山の峠に於て、御子を生みたまふと傳ふる神が、市杵島姫命きしまひめのみことであつたと謂ふのも、自分にとつては一種の暗示である。イチは現代に至るまで、神に仕へる女性を意味して居る。語の起りはイツキメ(齋女)であつたらうが、又一の巫女みこなども書いて、最も主神に近接する者の意味に解し、母と

子と共に在るときは、其子の名を小市とも又市太郎とも傳へて居た。代を重ねて神を代表する任務を掌つて居るうちに、次第に我始祖をも神と仰いで、時々は主神と混同する場合さへあつたのは、言はゞ日本の固有宗教の一つの癖であつた。故に公の制度としては齋女の風は夙に衰へたけれども、尙民間に在つては清く且つ慧しい少女が、或は神に召されて優れたる御子を産み奉るべしといふ傳統的の空想を、全然脱却することを得なかつたのかと思ふ。信仰圏外の批判を以てすれば、之を精神疾患の遺傳とも謂ふことが出来るが、平和古風の山村生活に在つては全く由緒ある宗教現象の一つであつた。殊に又深山の深い緑、白々とした雲霧の奥には、屢々其印象と記憶を新たにするだけの、天然の力が永く後々まで潜んで居たのである。

二〇 深山に小兒を見るといふ事

日向の獵人の山神祭文にも、山の神千二百生れたまふといふことがあるが、山を越えて肥後の球磨郡に入ると、近山太郎中山太郎、奥山太郎各三千三百三十三體と唱へて、一萬に一つ足らぬ山の神の數を説くのである。算へた數字で無いことは固よりの話だが、此點は頗る足柄山の金太郎など、思想變化の方向を異にして居るやうに思はれる。所謂大山祇命の附會が企てられた以前、山神の信仰には既に若干の混亂があつた。木樵獵人が各其道に由つて拜んだ外に、野を耕す村人等は、春は山の神里に下つて田の神と爲り、秋過ぎて再び山に還りたまふと信じて、農作の前後に二度の祭を営むやうになつた。伊賀地方の鈎曳の神事を始とし、神を誘ひ下す珍しい慣習は多いのであるが、九州一帯では之に對して、山ヲ

ロ河ワロの俗傳が行はれて居る。中國以東の河童が淵池毎に孤居するに反して、九州でミヅシン又はガアラツバと稱する者は、常に群を爲して住んで居た。さうして冬に近づく時それが悉く水の畔を去つて、山に還つて山童やまわらとなると考へられ夏は又低地に降り來ること、山の神田の神の出入と同じであつた。紀州熊野の山中に於て、カシヤンボと稱する靈物も、略之に類する習性を認められて居る。寂寥たる樹林の底に働く人々が、我が心と描き出す幻の影にも、やはり父祖以來の約束があり、土地に根をさした歴史があつて、萬人をのづから相似たる遭遇をする故に、假に境を出ると忽ち笑はれる程のはかない實驗でも、尙信仰を支持するの力があつた。まして況んや其間には今も一貫して、日本共通の古くからの法則が、まだ幾らも残つて居たのである。

西遊記其他の書物に、九州の山童として記述してあるのは、他の府縣で謂ふ山男のことであつて、其舉動なり外貌なりは、到底河童の冬の間ばかり、化して爲

る者とは思はれぬのであるが、別に此以外に谷の奥に潜んで、小さな怪物の居るといふ言ひ傳へはあつたので、山童はもと恐らくは此方に屬した名であつた。壹岐の島では一人の旅人が、夜通しがや／＼と宿の前を、海に下つて行く足音を聞いた。夜明けて訊ねるとそれは山童の山から出て來る晩であつた。或は又山の麓の池川の堤に、子供のかと思ふ小さな足痕の、無數に残つて居るのを見て、河童が山へ入つたと謂ふ地方もある。秋の末近く寒い雨の降る夜などに、細い聲を立て、渡り鳥の群が空を行くの、あれがガアラツバだと耳を峙て、聽く者もあつた。阿蘇の那羅延坊などいふ山伏は、山家に住みながら河童豫防の護符を發行した。即ち夏日水邊に遊ぶ者の彼等の害を懼るゝ如く、山に入つては又山童を忌み憚つて居た結果かと思はれるが、近世に入つてから其實例が漸く減少した。大體にこの小さき神は、人間の中の小さい者も同じやうに、氣輕な惡戯が多くて驚かすより以上の害は企て得なかつた。注意をすれば之を防ぐことが出來た爲に、

後次第に人が其威力を無視するに至つたのである。觀惠交話といふ二百年程前の書物には、豊後の國かと思ふ或山奥に、せこ子と稱する怪物が居る話を載せて居る。形は三尺から四尺、顔の真中に眼が只一つである外、全く人間の通りで、身には毛も無く又何も著ず、二三十づゝ連れだつてある。人之に逢へども害を作さず、大工の持つ墨壺を事の外ほしがれども、遣れば悪しとて與へずと袖たちは語る。言葉は聞えず、聲はひう／＼と高く響く由なりと謂つて居る。

眼が一つといふことは突然に聞けば仰天するが、土佐でも越後でも、又朝鮮でも、或は遠く離れて歐羅巴の多くの國の田舎でも、斯んな境遇の非類の物には、折々附いて廻る噂である。如何してさういふ風に目に見えたかは、殘念ながらもだ明白に判らぬといふ迄で、先づは怪物の證據とでも言ふべきものであつた。大和吉野の山中に於ては、又木の子と名くる凡三四歳の小兒ほどの者が居た。身には木の葉を著て居るとある。是は扶桑怪談實記の誌す所であつて、其姿有りとも

無しとも定まらずなど、至つて漠然たる話ながら、山働きの者折々油断をする。と木の子に辨當を盗まれることがあるので、木の子見ゆるや否捧を以て之を追散らすを常とすともあれば、少なくとも多數の者が知つて居たのである。此外にも秋田の早口澤の奥に鬼童といふ者の住むことは、黒甜瑣語三編の四に見え、土佐の大忍郷おほさいの山中に、笑ひ男といふ十四五歳の少年が出て笑ふことが、土州淵岳志に書留めてある。それが誇張であり若くは誤解なることは、細かに讀んで見ずとも斷定してよいのであるが、斯ういふ偶然の一致がある以上は、誤解にも尙尋ねべき原因があるわけである。

其上にまだ時としては、誤解とも誇張とも考へられぬ場合もある。是は南方熊楠氏の文通によつて知つたのだが、前年東部熊野の何とか峠を越えようとした旅人、不意に路傍の笹原の中から、がさ／＼と幼兒が一人這ひ出して來たのを見てびつくりして急いで山を走り降つた。それから幾日かを経て同じ山道を戻つて來

ると、今度は其子供が首を斬られて同じあたりに死んで居たのを見たといふ。頭も尻尾も無く話はたゞ是だけだが、その簡單さが寧ろ此噂の人の、作つた物語で無いことを感ぜしめる。南方氏の書状は之に附加へて、印度は地方に由つて狼の穴から生きた人間の赤兒を拾つて來た事件が、今でも新聞其他に折々報ぜられる。此國は狼の害甚だ多く、小兒の食はれる實例が毎年の中々の數に達し、狼に食はれた子供の首飾腕飾の落ちたのを、山をあるいては拾ひ集める職業さへ有る。最近のロミュルスは即ち此連中によつて發見せられるので、狼が飽滿して偶然に食ひ残した子供か、無邪氣に食を求めて狼の乳を吸ひ、自然に猛獸の愛情を喚起して狼の仔と共に育てられるのだ。或孤兒院へ連れて來た童子などは、四つ這ひをして生肉の他は食はず、うなる以外に言語を知らず、舉動が全然狼の通りであつたと報告せられて居ると示された。但し此種の出來事は必ず昔からであらうが、之に基いて狼を靈物とした信仰はまだ聞かぬに反して、日本の狼は山の神であつても子供を取つたと云ふ話ばかり多く傳はり、助け育てたと云ふ實例は無いやうである。故に性急に此方面から山の赤子の説明を引出さうとしてはならぬのである。

二一 山姥を妖怪なりとも考へ難き事

山姥山姫は里に住む人々が、もと若干の尊敬を以て付與したる美稱であつて、或はさう呼ばれてもよい不思議なる女性が、曾て諸處の深山に居たことだけは、略疑を容れざる日本の現實であつた。但し之に關する近世の記録と口承とは、甚だしく不精確であつた故に、最も細心の注意を以て、その誤解誇張を辯別する必要があるのは勿論である。自分が前に列記した幾つかの見聞談の如く、女が中年

から親の家を去つて、彼等の仲間に加はつたといふ例の外に、別に最初から山で生れたかと思はれる山女も往々にして人の目に觸れた。是も熊野の山中に於て、白い姿をした女が野猪の群を追掛けて、出て來ることがあると、秉穂録といふ本に見えて居る。土佐では横山郷の宇筒越で、與茂次郎といふ獵師夜明に一頭の大鹿の通るのを打留めたが、忽ち其あとから背丈一丈にも餘るかと思ふ老女の、髪赤く兩眼鏡の如くなる者が、其鹿を追うて來たのを見て動顛したと、寺石氏の土佐風俗と傳説には誌してある。

猪を追ふ女の白い姿と謂ふは、或は裸形のことを意味するのでは無かつたか。薩摩の深山でも往々にして婦人の姿をした者が、嶺を過ぐるを見ることがある。必ず髪を振亂して泣きながら走つて行くと、此國の人上原白羽といふ者が、今齊諧の著者に語つて居る。それが若し實驗者の言に基くものならば、泣きながらとは多分奇聲を發して居たことを謂ふのだらう。遠野物語に書留められた山中深夜

の女なども、待てちやアと大きな聲で叫んだと謂つて居る。他の地方にも似たる例は多く、大抵は背丈が無暗に高かつたことを説いて居るが、怖ろしくて遁げて來た者の觀察だから、寸法などは大ざつばなものであらうと思ふ。それよりも土地を異にし場合を異にして、大凡形容の共通なるもの、例へば聲とか髪の毛の長く垂れて居たとか謂ふ點の同じかつたのは注意に値する。山で大きな女の屍體を見たと云ふ話は、是も幾つかの類例が保存せられてあるが、就中有名なのは夙く橘南谿の西遊記に載せられた日向南部に於ける出來事である。

日向國飢肥領の山中にて、近き年菟道弓にて恠しきものを取りたり。惣身女の形にして色ことの外白く、黒髪長くして赤裸なり。人に似て人に非ず。獵人も之を見て大に驚き恠み人に尋ねけるに、山の神なりと謂ふにぞ、後の祟りも恐ろしく取棄てもせず、其まゝにして捨置きぬ。見る人も無くて腐りしが、後の祟りも無かりしとぞ。又人のいひけるは、是は山女と謂ふものにて、深山にはまゝある

ものといへり云々。この菟道弓のウヂといふのは、野獸が踏みあけた山中の通路である。同じ處を往來する習性があるのを知つて、かゝれば獨りでに發するやうにウヂ弓を仕掛けて置くのである。それに來て斃れたといふのは、幾ら神で無くとも驚くべき不注意であつて、珍らしい事件であつたに相違ないが、都に住む橘氏ならば兎に角、土地の獵人が始めて名を知つたといふのは、稍信じにくい話である。殊に此方面は今でも山人の出現が他に比べては著しく頻繁であり、現に此記事以後にも、色々の珍聞が傳へられて居るのである。

八田知紀翁の霧島山幽境眞語の終りに、次のやうな一話が載せてある。

おとゞし(文政十二年)の秋、日向の高岡郷(東諸縣郡)にもしける時、靱木村なる郷士、靱木新右衛門と云へる人の物がたりに、高鍋領の小菅嶽といふ山に、高岡郷より獵に行通ふ者のありけるが、一日毘を張り置けるに、恠しき物なんか、

りたりける。さるは大方は人の形にて、髪いと長く、手足みな毛おひみちたり。さてそれが謂けひるは、私はもと人の娘なり。今は數百年の昔、世の亂れたりし時、家を遁れ出てこの山に兄弟共に隠れたりけるが、それよりふつに人間の道を絶ちて、朝夕の食ひ物としては、鳥獸木の實やうのものにて有り經しかば、をのづから斯う形も恠しくは成りにけり。今日しも妹の在る處に通はんとて、夜中に立ちて物しけるに、思はんやかゝる目に遭はんとは。いかで〜我命をば助けよかしと、涙おとして詫びけれど(その言語今の世の詞ならで、定かには聽取りかねしとぞ)、いといぶかしくや思ひけん、其儘里へ馳せ還りて、友あまたかたらひ來て、其女を殺してけり。さて其男は幾程も無く病み煩ふことありて死にけりとか。こは近頃の事なりとて、男の名も聞きしかど忘れにけり。

小山勝清君の外祖母の話であつた。明治の初年、肥後球磨部の四浦村と深田村との境、高山の官山の林の中に、獵師の掛けて置いた猪毘に罹つて、是も一人の

若い女が死んで居た。丸裸であつたさうだ。之を附近の地に埋めたが、後に祟りがあつたと云ふ話である。我々の注意するのは、以上三つの話が少しづつ、時を異にし、又僅かばかり場處をちがへて、何れも霧島市房連山の中の、出来事であつたと云ふ點である。但し猪毘の構造を詳しく知らねばならぬが、かゝつた女が身の上を語つたといふ小菅嶽の一條には、甚だしく信じにくいものがある。姉と妹とが別れ／＼に住んで居て、時あつて相訪ふといふことは話の様式の一つであり亂を避けて山に入つたと云ふのも、此地方の人望ある昔談りに他ならぬ。言葉が古風で聽取りにくかつたといふ説明と共に、必ず仲繼者の潤飾が加はつて居るかと思ふ。それよりも大切な點は僅かな歲月、僅かな距離を隔て、似た様な三つの事件が起り、しかもそれ／＼状況を異にして、眞似た痕跡の無いことである。自分はず今に又新らしい報告の、更に附加せらるべきことを豫期して居る。

○

他の地方の類例は又熊野の方に一つある。長八尺ばかりな女の屍骸を、山中に於て見た者がある。髪は長くして足に至り、口は耳のあたりまで裂け、目も普通よりは大なりと記して居る。それから越後野志卷十八には、山男の屍骸の例が一つある。天明の頃、此國頸城郡姫川の流に、山男が山奥から流れて來た。裸形にして腰に藤蔓を纏ふ。身のたけ二丈餘とある。但し人恐れて敢て近づかず、遂に海上に漂ひ去ると謂つて、寸尺は測つて見たのでは無かつた。しかも二丈餘といふのは兼て此地方で言ふことゝ見えて、同じ書物の他の條にもさう書いてある。但し山男の身長の遙かに尋常を超えて居たことは、他の多くの地方でも言ふことで、或は事實では無いかと思ふ。此序にほんの二つか三つ實例を擧げて見るならば、有斐齋劄記に對馬某といふ物産學者、藥草を採りに比叡山の奥に入つて、偶々谷を隔て、下の方に、一人の小兒の岩から飛降りてはまた攀ぢ登つて遊んで居るのを見た。村の子供が來て遊ぶものと思つて居たが、後日其處を通つて見る

に、岩は高さ數仞の大岩であつた。それから推して見ると小兒と思つたのは、身の丈一丈もあつたわけで、始めて怪物といふことに氣がついた。石黒忠篤君が曾て誰からか聽いて話されたのは、幕末の名士川路左衛門尉、或年公命を帯びて木曾に入り、山小屋にとまつて居ると、月明かなる夜更に其小屋の外に来て、高聲に喚ぶ者がある。刀を執つて戸を開いて見るに、そこには早影も見えず、小屋の前の山を極めて丈の高い男の下つて行く後姿が、遠く月の光で見えたさうだ。山男であらうと其折從者に向つて言はれたが、他日終に再び之を口にせず、先生の日記にも傳にも、其事を記したものは無かつたといふ。山中笑翁が前年駿州田代川の奥へ行かれた時、奥仙侯の杉山忠藏と云ふ人が、其父から聽いたと云つて語つた話の中に、若い時から獵がすきで、毎度鹿を追うて山奥に入つたが、眞に怖ろしく又不思議だと思つた事は、生涯に二度しかない。其一度は山中の草原が丸太でも曳いて通つたやうに、一筋倒れ伏して居るのを恠しんで見て居るうちに、

前の山の樹木がまた一筋に左右に分れて、次第に頂上に押登つて行つたこと、今一度は人の足跡が土の上に在つて、其大きが非常なものであつた。兼て斯んな場合の萬一の用意に、持つて居る鐵の彈丸を銃にこめて、猶奥深く入つて行くと、ちやうど暮方のことであつたが、不意に行く手の大岩に足を踏掛けて、山の蔭へ入つて行く大男の後姿を見た。其身の丈が見上げて目も届かぬ程に高かつた。餘り怖ろしいので鐵砲を打放す勇氣も無く還つて來たと語つたさうである。昨今は既に製紙や枕木の爲に、散々に伐り荒されたから事情も一變したが、以前は此邊から大井の川上にかけては、山人に取つての日高の沙留ひなたとも謂ふべく、最も豊富なる我々の資料を藏して居た。安倍郡大川村大字日向ひなたの奥の藤代山などでも、曾て西河内の某といふ獵師が、大きな人の形で毛を被つた物を、鐵砲で打留めたことがあつた。駿河國新風土記卷二十には、何でも寛政初年の事であつたらしく記して居る。打留めたもの、餘りの怖ろしさに、其儘にして家に歸り、それが病

の元になつて獵師は死んだ。其遺言に一年も過ぎたなら、斯うくした處だから往つて見よとあつたので、其通りに時経て後出かけて捜して見ると、偉大なる脛の骨などが落散り、傍には又四五尺あるかと思ふ白い毛が、夥しくあつたと傳へられる。其様に長いならば髪の毛だらうと思ふが、何分多くは何段かの又聞きであつた爲、滿身に毛を被るといふ記事がいつも精確で無く、殊に此地方では猿の功經たものとか、狒々とかいふ話が今でも盛に行はれて、一層人の風説を混亂せしめる。新聞などを注意して居ると、四五年に一度位はさういふ噂が必ず起り、其實打取つたのは稍大形の猿であり、只其話と寸法とのみが以前の山男の方に近くなつて居る。つまりはうそであり誇張ながらも、由つて來る所だけはあるのである。尙最後に今一つ、どうでも猿では無かつた具體的の例を出して置く。是は駿國志料卷十三、駿河國巡村記志太郡卷四に共に録し、前の二つの話よりは少しく西の方の山の、やはり百餘年前の出來事であつた。

大井川の奥なる深山には山丈やまじやうといふ怪物あり。島田の里人に市助といふ者、材木を業として此山に入ること度々なり。或時谷畠の里を未明に立ち、智者山ちしやまの險岨を越え、八草の里に至る途中、夜既に明けんとするの頃深林を過ぐるに、前路に數十歩を隔て、大木の根元に、たけ一丈餘の怪物よりかゝるさまにて、立ちて左右を顧みるを見たり。案内の者潜かに告げて言ふ。かしこに立つは深山に住む所の山丈と云ふもの也。彼に行逢へば命は測り難し。前へ近づくべからず又聲を揚ぐべからず、此林の茂みに影を匿せと謂ふ。市助は怖れおびえて、もとの路に馳せ返らんと言へど、案内の者制し止め、暫時の間に去るべければ日の昇るを待てと言ふまゝに、せんすべ無く只聲を呑みてかたへに隠る。其間にかの怪物、樹下を去りて峯の方へ疾走す。潜かに之を窺ふに、形は人の如く髪は黒く、身は毛に蔽はれたれど面は人のやうにて、眼きらめき長き唇そりかへり、髪は毛は一丈餘にてかもしを垂れたるが如し。市助は之を見て身の毛立ち足の踏みどを知らず。

されど峯の方へ走り行くを見て始めて安堵の思を爲し、案内と共にかの處に來りて其跡を閲するに、惟獸の糞樹下にうづだかく、その多きこと一箕ばかりあり、あたりの木は一丈ほど上にて皮を剥きさぐりたる痕あり。導者曰ふ。これ惟物があま皮を食ひたる也。惟物は又篠竹を好みて食ふといへり。糞の中には一寸ばかりに噛み碎ける篠竹あり。獸の毛もまじりたりしとかや、按ずるに是は狒々と稱するものにて、山丈とは異なるなるべし(以上)。此話は如何にも聽いた通りの精確な筆記のやうだが、やはりよく見ると、文人の想像が少しはまじつて居ること、恰かも噛碎いた篠竹の如くである。例へば長き唇反り返るとあるのは、支那の書物に古くからあることで、實はどんな風に長いのか、日本人には考へも付かぬ。到底夜の引明けなどに眼につくやうな特徴では無かつたのである。山丈のジョウは高砂の尉と姥などのジョウで、今の俗語のダンナなどに當るだらう。即ち山人の男子のやゝ年輩の者を、幾分尊んで用ゐた稱呼にして、正しく山姥と對立すべき中世語であつた。

き中世語であつた。

一二二 山女多くは人を懐かしがる事

全體に深山の女たちは、妙に人に近づかうとする傾向が有るやうに見える。或は婦人に普通なる心弱さ、乃至は好奇心からでは無いかと、思ふくらゐに馴々しかつたこともあるが、それにしては彼等の姿形の、大きく又氣疎かつたのが笑止である。

山で働く者の小屋の入口は、大抵は垂たれ蓆むしろを下げたばかりであるが、山女夜深く來つてその蓆をかゝげ、内を覗いたといふ話は、諸國に於て屢之を聞くのである

さういふ場合にも髪は長くして亂れ、眼の光がきら／＼として居る爲に、喰ひにでも來たかの如く、人々が怖れ騒いだのである。或は又日が暮れて後、突然として山小屋に入來り、圍爐裏の向ふに坐つて、一言も物を言はず、久しく火にあたつて居たと云ふ話も多い。豪膽な木挽などが退屈のあまりに、之に戯れたなど、いふ噂のあるのは自然である。羽後の山奥ではこんな女をわざ／＼招き寄せる爲に、ニシコリと云ふ木を爐に燃す者さへあると黒甜瑣語などには記して居るが、それは果してどういふ作用をするものか、其木の性質と共に尙尋ねて見たいと思つて居る。

今から三十年あまり以前、肥後の東南隅の湯前村の奥、日向の米良(メラ)との境の仁原山に、アンチモニイの鑛山があつた。其事務所に住んで居た原田瑞穂といふ人が、夜分少し離れた下の小屋に往つて、人足たちと一緒になつて夜話をして居ると、時々ばら／＼と其小屋の屋根に、小石を打付ける音がする。少し氣味

が悪くなつてもう還らうと思ひ、其小屋を出てうしろの小路を僅か來ると、だしぬけに背の高い女が三人横の方から出て、其一人が自分の手を強く捉へた。三人ながら殆ど裸體であつた。何か頻りに物を言ふけれども、怖ろしいので何を言ふか解らなかつた。其内に大聲に人を喚んだ聲を聞いて、小屋から多勢の者がどやどやと出て來たので、女は手を離して足早に嶺の方へ上つてしまつた。是も小山勝清君の話で、經驗をした原田氏は、其頃まだ若かつた同君の叔父である。

自分はこの鑛山のおつた仁原山が、前に擧げた獸のわなに山女の死んで居た三つの場處の、略まん中である故に、殊に此話に注意をする。若し山人にも土地に由つて、氣風に相異があるものとすれば、南九州の山中に住む者などは、取分け人情が惇撲で且つ無智であつたやうに思はれるからである。

○

此類の實例は行く／＼尙追加し得る見込がある。前にいふ仁原山は市房山と白

髮岳との中間に在る山だが、その白髮岳の山小屋でも、近年山の事業の爲に暫く入つて居た某氏が、夜になると山女が来て足を持つて引張るので、何分にも怖ろしくて我慢が出来ぬと謂つて、還つて来たこともあつた。球磨郡四浦村の吉といふ木挽が、曾て五箇庄の山で働いて居た時に、小屋へ黙つて入つて来た髮の毛の長い女などは、にこ／＼として頻りに自分の乳房をいぢつて居た。驚いて飛出して銃砲などを持つて、多勢で還つて来て見るともう其邊には居なかつたさうである。單に遠くから姿を見たといふだけの話なら、まだ此附近にも近頃の例が幾つかある。東北地方では會津の磐梯山の入山などにも、山女らしい話が折々傳へられる。龍章東國雜記の第六集に、文化の初頃、山麓某村の農民二人、川芎といふ薬草を採りに、此山西北の谿に入つて還ることなり難く、流に傍うた大木の虚洞うつろに夜を過すとて、穴の外に火を焚いて置くと、たけ六尺ほどで髮の長さは踵を隠すばかりなる女が、澤蟹を捕へて此火に炙つて食ひ、又兩人を見て笑つたと記し

て居る。これ俗に山ワロと謂ひ野猿の年經たるもの也。奥羽の深山にはまゝ居る由にて、よく人の心中を知れども人に害を爲すことなしなど、あつて、土地でも詳しいことは知らぬのである。又老媪茶話には猪苗代白木城の百姓庄右衛門、同じく磐梯山の奥に入つて、山姥のかもじと稱するものを見付けたことを載せて居る。長さ七八尺にして白きこと雪の如く、松の大木の梢にかゝつて居たとあつて其末に、世に謂ふ山姥は南蠻國の獸なり。其形老女の如し。腰に皮ありて前後に垂れ下りたぶささの如し。たま／＼人を捕へては我が住む岩窟に連れゆき、強ひて夫婦のかたらひを求む。我心に従はざるときは其人を殺せり。力強くして丈夫に敵す。好みて人の小兒を盗む。盗まれし人之を知り、多勢集まり居て山姥が我子を盗みしことを大音に罵り耻しむるときは、窃かに小兒を連れ來り、其家の傍に捨て置き歸るといへりなど、謂つて居る。實際の遭遇が漸く稀になつて雜説はいよ／＼附加はるので、是なども支那の書物の知識が、もう半分ばかりもまじつ

て居るやうである。

或は單に人間の爐の火を戀しがつて、出て來るものとも想像し得る場合がある冬の日に旅をした人なら此心持は解るが、假令見ず知らずの人が焚火をする處でも、妙に近づいて見なくなるものである。夜分に人の家の火が笑語の聲と共に、戸の隙間から洩れるのを見ると、嫉ましくさへなるものだ。無邪氣な山の人々も此光に引付けられて來るのかも知らぬ。乗穂録には又熊野の山中で炭焼く者の小屋へ、七尺餘りの大山伏の遣つて來ることを録して居る。但し魚鳥の肉を火に投ずるときは、其臭氣を厭うて去ると謂ふのは、少しく前の澤蟹の話とは一致せぬが、火に對する趣味などにも地方的に異同があるのだらう。前に引用した雪窓夜話の上卷には、又次のやうな一件も記してある。即ち因州での話である。

西村某と云ふ鷹匠あり。鵠を捕らんとて知頭郡蘆澤山の奥に入り、小屋を掛けて

一人住みけり。夜寒の頃なれば、庭に火を焚きてあたり居けるに、何者とも知れず、其たけ六尺あまりにて、老いたる人の如くなる者來りて、默然と彼の火によりて、鼻をあぶりてつくばひたり。頭の髮赤くちぢみて、面貌人に非ず猿にも非ず、手足は人の如くにして、全身に毛を生じたり。西村は天性剛なる男なれば、更に驚くこと無く、汝は何處に住む者ぞと問ひけれども、敢て答へず。暫くありて立歸る。西村も其後に沿ひて出でけれども、夜甚だ暗くして、其行方を知らずなりぬ。其後又來りて、小屋の内を覗くことありしに、西村、又來たか、今宵は火は無きぞと言ひければ、其まゝ歸りけると也。里人に其事を語りければ、山父と云ふもの也。人に害を爲す者に非ず。之を犯すことあれば、山荒るゝと謂ひけると也。

スキ―で近頃有名になつた信越の境の山にも、半分ほど共通の話があつて、北越雜記卷十九に出て居る。斷つて置くが此等二つの書物は共に寫本であつて流布

も少なく、一方の筆者は他の一方の著述の存在をすらも知らなかつたのである。それを自分たちが始めて引き比べて見る處に、學問上の價值が存するのである。妙高山燒山黒姫山皆高嶺にて、信州の飯綱戸隱、越中の立山まで、萬山重なりて其境幽凄なり。高田の藩中數十軒の薪は、皆この山中より伐出す。凡そ奉行より木挽柚の輩に至るまで、相誓ひて山小屋に居る間、如何なる恠事ありても人に語るること無し。一年升山某、役に當りて數日山小屋に在りしが、夜は人々打寄りて絶えず爐に火を焚きてあたる。然るに山男と云ふもの、折ふし來ては火にあたり一時ばかりにして去る。其形人に異なること無く、赤髮裸身灰黒色にして、長は六尺あまり 腰に草木の葉を纏ふ。更に物言ふこと無けれども、聲を出すに牛のいばふ如く聞ゆ。人の言語はよく聞分くる也。相馴れて知人の如し。一夕升山氏之に向ひて、汝木葉を著るは耻ることを知るなり。火にあたるは寒さを畏るゝなり。然らば何ぞ獸の皮を取りて身に纏はざるやと言ひしに、つくづくと之を聞き

て去れり。翌夜は忽ち羚羊二疋を兩の手に下げて來り、升山の前に置く。其意を解し、短刀もて皮を剥ぎて與ふれば、山男は頻りに口を開き打笑ひ、悦びて歸りぬ。すでにして又來たるを見れば、さきの皮一枚は、藤を以て繋ぎ合せて背に負ひ、他の一枚は腰に巻き付けたり。されど生皮を其まゝ著たる故、乾くにつれて縮みより硬ばりたり。皆々打笑ひ、熊の皮を取り、十文字にさす竹入れ、小屋の軒に下げて見せ、且つ山刀一挺を與へて歸らしむ。其後數日來ずと謂へり(以上)。是などは祕密を誓約した人々の抜け荷だから、若干の懸値があつても吟味をすることが困難である。

二三 山男にも人に近づかんとする者ある事

山人も南九州の山に住む者が、特に無害であり又人なつかつたやうに思はれる。山中をさまよつて危害の身に及ぶに心付かず、屢々里の人の假小屋を訪問して、それ程までに恐れ嫌はれて居ることを知らなかつたといふ例は、主として霧島連峯中の山人の特質であつた。尙同じ方面の出来事として、水野葉舟君から又次のやうな話も教へられた。

日向南那珂郡の人身上千藏君曰く、同君の祖父某、四十年ばかり以前に、山に入つて不思議な老人に行逢うたことがある。白髪にして腰から上は裸、腰には帆布のやうな物を巻付けて居た。にこ／＼と笑ひながら此方に向いて歩いて歩いて来る様子が、如何にも普通の人間とは思はれぬ故に、兼て用心の爲に背に負ふ手裏剣用の小さい刀の柄に手を掛け、近く来ると打つぞと大きな聲でどなつたが、老翁は一

向に無頓着で、尙笑ひながら傍へ寄つて来るので、段々怖ろしくつて引返して遁げて来た。ところがそれから一月ばかり過ぎて又同じ山で、村の若者が再び同じ老人に逢つた。一羽の雉子を見つけて銃砲の狙ひを定め、將に打放さうとすると、不意に横合から近よつて此男の右の腕を柔かに叩く者があつた。振向いて見ればその白髪の老人で、やはりにこ／＼と笑つて立つて居る。白髪の端には木の葉などが附いて居たといふ。之を見ると怖ろしさの餘り氣が遠くなり、銃砲を揚げたまゝで立ちすくんで居たのを、暫らくしてから村の人に見付けられ、正氣になつて後に此話をしたさうだ。眼の迷ひとかまぼろしとか、言つてしまふことの出来ない話で、しかも作り話としては何の曲も無く、且つ二度の實見が一致して居た。何かは知らず兎に角にそんな人が、此邊の山には正しく居たのである。

○ 山人が我々を目送したと云ふ話も折々聞く。さうして甚だ氣味の悪いことに、

之を解説するのが普通であつた。氣味の悪くないこともあるまいが、彼等は元來が眞の有閑階級だから、實ははつきりとした趣意も無く、只眺めて居た場合もあつたかも知れぬ。但し少年や女には、之を怖れる理由は十分にあつた。前年前田雄三君から聞いた話は、越前丹生郡三方村大字杉谷の、勝木袖五郎といふ近頃まで達者で居た老人、今から五十餘年前に十二三歳で、秋の末に枯木を取りに村の山へ往つた。友だちの中に意地の悪い者があつて、うそをついて皆は他の林へ往つてしまひ、自分一人だけ村の白山神社の片脇の、堂ヶ谷といふ處で木を拾つて居るとき、ふと見れば目の前のカナギ(くぬぎ)の樹にもたれて、大男の毛ずねがぬくと見えた。見上げると目の届かぬ程に背が高い。怖ろしいから直ぐに引返して、それから程近い自分の家に戻り、背戸口に立つて再び振返つて見ると、その大男は尙もとの場所に立ち、凄い眼をしてぢつと此方を見て居たので、其時になつて正氣を失つてしまつたさうである。この堂ヶ谷は宮からも人家からも、至つ

て近い低い山であつた。斯んな處まで格別の用も無いのに、稀には山人が出向いて來て人を見て居たのである。神隠しの風説などの起り易かつた所以である。

○
それから少なくとも我々に對して、常に敵意は持つては居なかつたといふ證據もある。小田内通敏氏の示された次の一文は、何かの抄録らしいが元の書物は同氏も知らぬといふ。津輕での話である。

中村澤目蘆谷村と云ふは、岩木山の岬にして田畑も多からねば、炭を焼き薪を樵りて、活計の一助となす。此里に九助といふ者あり。常の如く斧を携へて山奥に入り、柴立を踏分け溪水を越え、二里ばかりも躋りしが、寥廓たる平地に出でたり。年頃此山中を經過すれども、未だ見たること無き處なれば、始めて道に迷ひたることを悟り、且は山の廣大なることを思ひ、歎息してたゞずみしが、偶々あたりの谷蔭に人語の聽えしまゝ、其聲を知るべに谷を下りて打見やりたるに、身

の長七八尺ばかりの大男二人、岩根の苔を摘み取る様子なり。背と腰には木葉を綴りたるものを纏ひたり。横の方を振向きたる面構へは、色黒く眼圓く鼻ひしげ蓬頭にして鬚延びたり。其状貌の醜恠なるに、九助大に怖れを爲し、是や兼て赤倉に住むと聞きしオホヒトならんと思ひ急ぎ遁げんとせしが、過ちて石に蹶き轉び落ちて、却りて大人の傍に倒れたり。仰天し慄慄して口は物言ふこと能はず、脚は立つこと能はず、唯手を合せて拜むばかり也。かの者等は何事か語り合ひしが、やがて九助を小脇にかゝへ、嶮岨巖窟の嫌ひなく平地の如くに馳せ下り、一里餘りも來たりと思ふ頃、其まゝ地上に引下して、忽ち形を隠し姿を見失ひぬ。九助は次第に心地元に復し、始めて幻夢の覺めたる如く、首を擧げて四邊を見廻らすに、時は既に申の下りとおぼしく、太陽巒際らんざいに臨み返照長く横はれり。其時同じ業の者、手に／＼薪を負ひて樵路を下り來るに逢ひ、顛末を語り介抱せられて家に歸り著きたりしが、心中鬱屈し顔色憔悴して食も進まず、妻子等色々と保

養を加へ、五十餘日にして漸く回復したりと也。

二四 骨折仕事に山男を傭ひし事

但し山中に於ては、人は必ずしも山人を畏れては居なかつた。時としては其援助を期待する者さへあつたのである。例の橋氏の西遊記にもよく似た記事があるが、別に周遊奇談といふ書物に、山男を頼んで木材を山の口へ運ばせたといふ話を載せて居る。どの位までの誇張があるかは確かめ難いが、丸々根の無い噂とは考へられぬのである。

豊前中津領などの山奥では、材木の運搬を山男に委託することが多かつた。尤も彼等往來の場處には限があるらしく、里までは決して出て來ない。如何なる險

阻も牛の如くのそりくくと歩み、川が深ければ首まで水に入つても、水底を平地のやうにあるいて来る。たけは六尺以上の者もあつて、力が至つて強い。男は色が青黒く、大抵は肥えて居る。全身裸であつて下帯すらも無いが、毛が深いので男女のしるしは見えぬ。但し女は時に姿を見せるのみで出て働かうとはしない。さうして何か木の葉木の皮やらの物を綴つて著て居る。齒は眞白だが口の香が甚だ臭いとまで謂つて居る。勞賃は握り飯だとある。材木一本に一個二本に二個。持つて見て二本一度に擔げると思へば、一緒にして脇へ寄せる。約に背いて例へば二本に握り飯一つしか與へなかつたりすると、非常に怒つて永く其怨を忘れなす。愚直なる者だと述べて居る。

西遊記に謂ふ所の薩摩方面の山わろなども、やはり握り飯を貰つて欣然として運送の勞に服したが、若し仕事の前に少しでも與へると、之を食つてから逃げてしまふ。又人の先に立つて歩むことを非常に嫌ふ。つまりは米の飯が欲しいばかりに出て働くらしいので、時としては山奥の寺などに入つて来て、食物を盗み食ふことがある。但し鹽氣の有る物を好まぬと謂つて居る。以上二種の記録は少しづつの異同があり、材料の出處の別々なることを示して居る。是れ恐らくは信用すべき一致であらうと思ふ。

○

同じ周遊奇談の卷三には、又秋田縣下の山男の話を書いて、九州の例と比較してある。但し著者自分で見たと謂ふ點が安心ならぬ故に、特に原文のまゝ抄出して置く。

出羽國仙北より、水無銀山阿仁と云ふ處へ越ゆる近道、常陸内(ヒダチナイ)と云ふ山にて、路を踏み迷ひ炭焼小屋に泊りし夜、山男を見たり。形は豊前のに同じけれども力量は知れず。木も炭も石も何にでも負ひもせず。唯折々其小屋へ食事などの時分を考へ來るとなり。飯などを握りて遣はせば悦びて持ち退く。人の見

る處にては食せず。如何にも力は有りさう也。物は言はず。たゞのさく、立廻りあるくばかり也。尤も悪きことはせず。至つて正直なる由なり。此處にては山女は見ず。又其沙汰も無し。

○

山男は又酒がすきで酒の爲に働くと云ふ話が、桃山人夜話の卷三に出て居る。遠州秋葉の山奥などには、山男と云ふものありて折節出づることあり。柚山賤の爲に重荷を負ひ、助けて里近くまで來りては山中に戻る。家も無く從類眷屬とても無く、常に住む處更に知る者無し。賃錢を與ふれども取らず、只酒を好みて與ふれば悦びつゝ飲めり。物ごし更に分らざれば、啞を教ふる如くするに、其の覺り得ること至つて早し、始も知らず終も知らず、丈の高さ六尺より低きは無し。山氣の化して人の形と成りたるなりと謂ふ説あり。昔同國の白倉村に、又藏と云ふ者あり。家に病人ありて、醫者を喚びに行くとして、谷に踏みはづして落ち入り

けるが、樹の根にて足を痛め歩むこと能はず、谷の底に居たりしを、山男何處よりとも無く出で來りて又藏を負ひ、屏風を立てたるが如き處を安々と登りて、醫師の門口まで來りて搔き消すが如くに失せたり。又藏は嬉しさの餘りに之に謝せんとして竹筒ささへに酒を入れてかの谷に至るに、山男二人まで出で、其の酒を飲み、大に悦びて去りしとぞ。此事古老の言ひ傳へて、今に彼地にては知る人多し(以上)。又藏が醫者の家を訪れることを知つて、其門口まで送つてくれたといふ點だけが特に信用しにくいやうに思ふけれども、酒を禮にしたら悦んだといふことは有りさうな話であつた。